

仲間稲マタ原近世墓群Ⅱ

浦添カルチャーパーク整備事業及びてだこホール建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査

2014年3月

浦添市教育委員会

序

本報告書は、平成13、18年度に実施した仲間稲マタ原近世墓群の発掘調査成果をまとめたものです。

当墓群が所在する「浦添カルチャーパーク」は、本市の文化活動及び生きがい活動の拠点となる総合公園として平成13年度より公共施設整備を行ってまいりました。それらの整備工事に伴って近世の掘込墓が相次いで発見され、一帯には従来知られる遺跡範囲よりも広範囲で近世墓が所在することがわかってきました。

今回はこれらの工事中に発見された掘込墓8基の緊急発掘調査について報告するものです。

今回の調査では、蔵骨器の銘書から断片的な情報ではありますが「伊祖村」や「浦添村」の村名が確認されたほか、当市では類例の少ない墓室構造を持つ近世墓が発見され、当墓群の形成過程の一端を窺い知る貴重なデータを得ることができました。

今後、この調査成果が多方面に活用されるとともに地域史研究の前進に寄与することを切に願います。

結びに、今調査を実施するにあたりご協力いただきました関係各位の皆様に深く感謝申し上げます。

平成26年 3 月

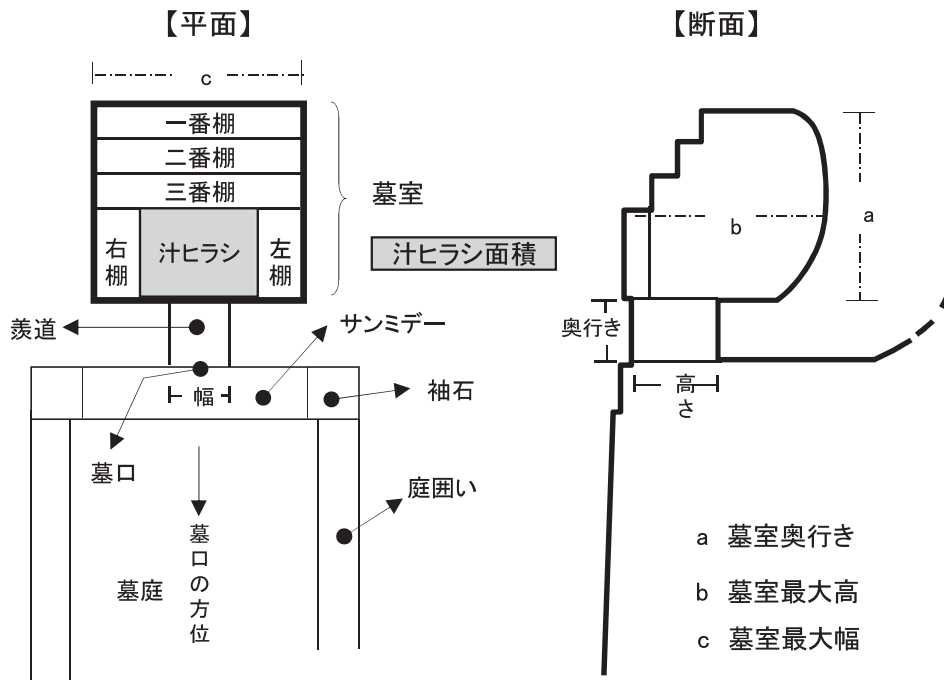
浦添市教育委員会
教育長 池原 寛安

例言

- 1 本報告書は、平成13、18年度に実施した仲間稲マタ原近世墓群の発掘調査の成果をまとめたものである。
- 2 発掘調査は浦添市による浦添カルチャーパーク整備事業及びてだこホール建設事業に伴うもので、浦添市教育委員会が同市より依頼を受けて実施した。
- 3 本書で使用した位置図は本市都市建設部作成の25,000分の1図を、詳細測量図等は企画部振興策推進プロジェクト及び公園緑地課所収のものを各所の承認を得て複製し調整したものである。
- 4 本書の執筆、編集は安和吉則が行った。
- 5 本書の作成で次の方々から調査協力及び指導助言をいただいた。記して感謝申し上げます。
菅原広史（2001年度発掘調査：人骨） 北條真子（2006年度発掘調査：人骨）
新里まゆみ（2001年度発掘調査：銘書） 鈴木悠（2006年度発掘調査：銘書）
- 6 発掘調査で出土した遺物及び調査記録等は、本市教育委員会で保管している。

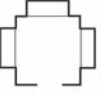
凡例

- 1 本書に表示した基準高はすべて海拔高を用い、メートル単位で表記した。
- 2 墓番号は調査した西暦年度下二桁と調査着手順の組み合わせにより番号を付した。2001年度に調査した1号墓は01-1号墓と表記している。
- 3 各墓の蔵骨器配置図の番号と表・図・図版中の蔵骨器の番号は一致している。
- 4 墓の各部名称のうち、墓口、汁ヒラシ、棚などの名称は『擇日墓造安葬年月日時』、『風水書』など近世文書の用語を使用した。なお、墓口から墓室に至る奥行き部分の名称を「羨道」、亀甲墓等にみられる庭積み部分を「庭囲い」と仮称した。墓の各部名称や計測位置は以下のとおり。

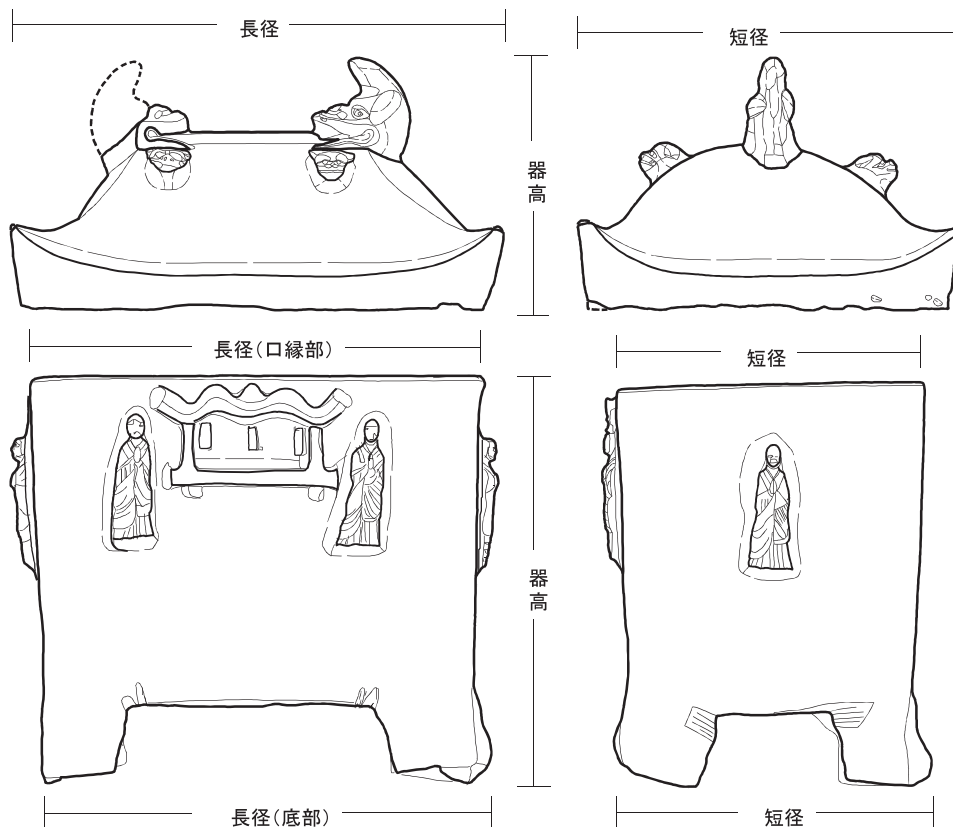
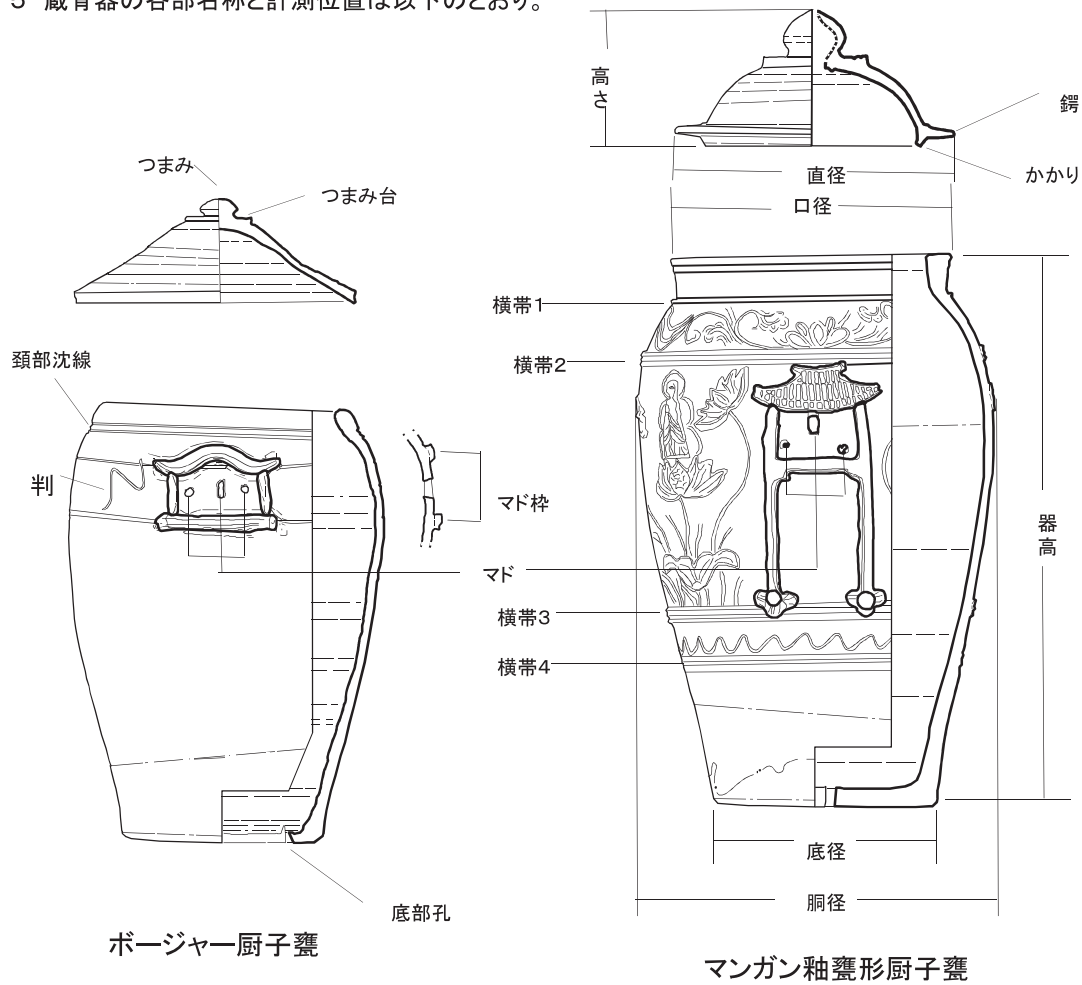


- ・蔵骨器の有無は、墓室での有無を意味する。また、墓室に蔵骨器が無い墓を「空き墓」と称している。
- ・表中の「－」記号は不明または計測不能を意味する。
- ・墓口の方位は、磁北を表す。主軸方向は墓室奥壁を背にして墓口方向を見ている。

4 墓室平面形の類型（浦添市教育委員会2007『市内遺跡発掘調査報告書（1）』を一部改変、加筆修正）

類型		柵の形状	墓室及び柵の特徴や構築方法
1類	a		墓室内に柵は無く、楕円またはいびつな形状。
	b		墓室内に柵は無いが、直線的な規格性で構築。
	c		柵は無く、蔵骨器が数点置けるくらいの広さで、墓口から奥壁まで直線的にのびる。1人（一次葬人骨）を安置する墓として造られる。また、側壁の片側または両側を拡張して蔵骨器を安置する場合もある。
	d		柵は無く、蔵骨器が数点置けるくらいの広さで、平面観は楕円形に近い。1c同様一次葬人骨を安置する墓として造られる。1cでは棺箱を縦置きするが、1dは横置きになる。
2類	a		正面の奥壁を凸状（＝出窓状）に成形。柵幅が汁ヒラシ幅より短くなる。
	b		正面奥壁と左右側壁を凸状に成形。
3類	a		正面と左右の平面観が「コ」字を横にした形状で、柵は平坦になる。柵の高さで分類できる可能性あり。
	b		平面観は3類aと同じだが、正面柵と左右柵の接地部に段差ができる。正面に比して左右の柵が低くなる。
	c		奥壁（正面）と側壁片側のみ柵を造る。平面観は「L」字を横にしたような形。
4類	a		墓室内が楕円またはいびつな形状で、ほぼ平行するように正面1段の柵を造る。
	b		墓室内が直線的な規格で成形され、正面に1段の柵を造る。柵の高さで細分類できる可能性あり。
	c		墓室内が直線的な規格で成形され、正面に2～3段の柵を造る。
5類	a		3類a＋4類c
	b		3類b＋4類c
	c		3類c＋4類c

5 蔵骨器の各部名称と計測位置は以下のとおり。



赤焼御殿型厨子甕

目 次

序文・例言・凡例・目次

第1章 はじめに

第1節 発掘調査に至る経緯	1
第2節 調査体制	2

第2章 位置と環境

第1節 位置	2
第2節 自然的環境	3
第3節 歴史的環境	3

第3章 調査の概要

第1節 調査の方法	6
第2節 遺構	6
第3節 遺物	7

第4章 調査の成果

第1節 01-1 号墓	9
第2節 01-2 号墓	10
第3節 06-1 号墓	26
第4節 06-2 号墓	26
第5節 06-3 号墓	27
第6節 06-4 号墓	27
第7節 06-5 号墓	28
第8節 06-6 号墓	36

第5章 総括	44
--------	----

報告書抄録

挿図目次

第 1 図	仲間稲マタ原近世墓群の位置	4
第 2 図	調査範囲	4
第 3 図	調査した墓の位置	5
第 4 図	01-2 号墓蔵骨器配置図	12
第 5 図	01-2 号墓遺構図	13
第 6 図	01-2 号墓出土遺物（蔵骨器 1）	16
第 7 図	01-2 号墓出土遺物（蔵骨器 2）	18
第 8 図	01-2 号墓出土遺物（蔵骨器 3）	20
第 9 図	01-2 号墓出土遺物（蔵骨器 4）	22
第 10 図	01-2 号墓出土遺物（副葬品）	25
第 11 図	06-5 号墓遺構図	30
第 12 図	06-5 号墓出土遺物（蔵骨器他）	32
第 13 図	06-5 号墓出土遺物（蔵骨器）	34
第 14 図	06-6 号墓遺構図	38
第 15 図	06-6 号墓出土遺物（蔵骨器）	40
第 16 図	06-6 号墓出土遺物（蔵骨器他）	42
第 17 図	01-2 号墓蔵骨器配置図	47

表目次

第 1 表	出土遺構一覧表	7
第 2 表	出土遺物一覧表	8
第 3 表	01-2 号墓遺構観察表	12
第 4 表	01-2 号墓出土遺物（蔵骨器）観察表 1	14
第 5 表	01-2 号墓出土遺物（蔵骨器）観察表 2	15
第 6 表	06-5 号墓遺構観察表	30
第 7 表	06-5 号墓出土遺物（蔵骨器他）観察表	31
第 8 表	06-6 号墓遺構観察表	38
第 9 表	06-6 号墓出土遺物（蔵骨器他）観察表	39
第 10 表	16～18 世紀の墓室の棚の有無と形状	44
第 11 表	近世期の造墓年判明墓一覧表	46
第 12 表	〃 時系列表	46
第 13 表	01-2 号墓出土蔵骨器種別等一覧	47
第 14 表	調査墓の推定造墓・使用年代	49

写真目次

図版 1	01-1 号墓	9
	全景、墓室内状況、ピット出土状況他	
図版 2	01-2 号墓	10
	墓室内状況、蔵骨器検出状況、墓口他	
図版 3	01-2 号墓	11
	着手前・完掘後、埋納土坑、集石他	

図版 4	01-2 号墓出土遺物（蔵骨器 1）	17
	ボージャー厨子甕：身 No. 1・4	
	マンガン釉甕形厨子甕：身 No. 5	
図版 5	01-2 号墓出土遺物（蔵骨器 2）	19
	ボージャー厨子甕：身 No. 6～8	
	ボージャー厨子甕 No. 11	
図版 6	01-2 号墓出土遺物（蔵骨器 3）	21
	赤焼御殿形厨子甕 No. 10	
図版 7	01-2 号墓出土遺物（蔵骨器 4）	23
	ボージャー厨子甕：蓋 No. 12～17	
	マンガン釉甕形厨子甕：蓋 No. 18・19	
	マンガン釉甕形厨子甕 No. 2	
図版 8	01-2 号墓出土遺物（蔵骨器 5）	24
	マンガン釉甕形厨子甕：身 No. 9	
図版 9	01-2 号墓出土遺物（副葬品）	25
	小杯・簪・銭貨・釘	
図版 10	06-1 号墓	26
	調査地遠景、検出後、墓室状況	
図版 11	06-2 号墓	26
	全景、サンミデー検出状況、汁ヒラシ	
図版 12	06-3 号墓	27
	検出状況、墓室、汁ヒラシ土坑	
図版 13	06-4 号墓	27
	検出状況、墓室俯瞰、作業風景	
図版 14	06-5 号墓	28
	発見時の状況、墓口の閉塞状況	
図版 15	06-5 号墓	29
	出土遺物検出状況、埋納土坑他	
図版 16	06-5 号墓出土遺物（蔵骨器他）	33
	ボージャー厨子甕 No. 1～3	
	瓶子	
図版 17	06-5 号墓出土遺物（蔵骨器）	35
	ボージャー厨子甕 No. 5・6	
	石厨子 No. 4	
図版 18	06-6 号墓	36
	完掘後全景、墓室の検出前後	
図版 19	06-6 号墓	37
	出土遺物検出状況、埋納土坑、排水溝他	
図版 20	06-6 号墓出土遺物（蔵骨器 1）	41
	ボージャー厨子甕 No. 1、3、5	
図版 21	06-6 号墓出土遺物（蔵骨器 2）	43
	ボージャー厨子甕 No. 2、4	
	転用蔵骨器 No. 6	
図版 22	01-2・06-5・06-6 号墓出土遺物（ブタ頭骨）	51

第1章 はじめに

第1節 発掘調査に至る経緯

周知の埋蔵文化財である仲間稲マタ原近世墓群の遺跡包蔵地で近世墓8基の発掘調査を行った。調査は平成13年度（2基）、平成18年度（6基）に実施し、経緯と期間の詳細は以下のとおりである。

01-1号墓

平成13年8月13日付け事務連絡で公園緑地課より浦添カルチャーパーク施設整備工事地内の埋蔵文化財確認依頼があり、文化課職員立会いのもと掘込墓1基（空き墓）が確認された。平成13年8月21日に公園緑地課と協議した結果、文化財保護法第57条の3第1項（平成13年8月27日付浦都公第119号浦添市長）及び第58条の2第1項（平成13年9月26日付浦教文第112号浦添市教育委員会教育長）の規定に基づく手続きを経て発掘調査を行うこととなった。

調査は記録作業（測量・写真撮影）を主体に平成13年10月3～5、9日の4日間で実施した。

01-2号墓

平成14年1月11日に公園緑地課より浦添カルチャーパーク内工事中に墓1基が見つかり、埋蔵文化財の確認依頼があった。墓は穴（墓室天井）が開いた状態で発見され、10基の蔵骨器が確認された。緊急を要する当墓の発掘調査は文化財保護法に基づく手続き上の時間的な問題があり、沖縄県教育庁へ事情を説明し指示を仰いだ結果、諸手続きについては速やかに行うことで了解を得て、平成14年1月18日に当墓の発掘調査の期間・費用、出土遺物の取り扱い等について公園緑地課と協議を交わし、文化財保護法第57条の3第1項（平成14年1月17日付浦都公第207号浦添市長）及び文化財保護法第58条の2第1項（平成14年1月18日付浦教文第112号浦添市教育委員会教育長）の手続きを経て発掘調査を行うこととなった。

調査は発掘作業と記録作業を主体に平成14年1月22日～29日の5日間で実施した。

06-1号墓

平成18年6月8日付浦企企第92号で浦添市長より、浦添市教育委員会教育長へ（仮称）てだこ交流文化センター建設工事地内の埋蔵文化財（掘込墓1基）の発掘調査について依頼があった。平成18年6月9日に市企画振興策プロジェクトとの協議後、発掘調査で対応することとなり、調査費用・期間等の調整を行った。同日付浦教文第76号で浦添市長宛、発掘調査の承諾と調査費用の予算措置が必要である旨を回答し、文化財保護法第99条第1項の規定に基づき、平成18年6月19日付浦教文第76号で沖縄県教育委員会教育長へ埋蔵文化財発掘調査について報告した。

調査は発掘作業と記録作業を主体に平成18年6月15、16、19日の3日間で実施した。

06-2～6号墓

平成18年7月7日付浦企企第129-1号で、浦添市長より浦添市教育委員会教育長へ、（仮称）てだこ交流文化センター建設工事地内の埋蔵文化財（掘込墓6基）の発掘調査について依頼があった。協議の結果、平成18年7月10日付浦教文第76号で浦添市長宛、発掘調査の承諾と調査費用の予算措置が必要である旨回答し、文化財保護法第99条第1項の規定に基づき、平成18年7月19日付浦教文第76号で

沖縄県教育委員会教育長へ埋蔵文化財発掘調査について報告した。

調査は、発掘作業と記録作業を主体に平成18年7月11～28日の期間（実調査10日間）で行った。

調査した上記の全ての墓は、仲間稲マタ原近世墓群に属している。

第2節 調査体制

調査体制は以下のとおりである。

調査主体	浦添市教育委員会	教育長	大盛 永意（平成13年度）
	同	同	西原 廣美（平成18年度）
	同	同	池原 寛安（平成25年度）
事業所管	浦添市教育委員会教育部	部長	与座 盛一（平成13年度）
	同	文化部 部長	安里 進（平成18年度）
	同	同	下地 安広（平成25年度）
事業総括	同	文化課 課長	安里 進（平成13年度）
	同	同	下地 安広（平成18年度）
	同	同	松川 章（平成25年度）
事業調整	同	文化財係長	下地 安広（平成13年度）
	同	同	宮里 信勇（平成18年度）
	同	同	渡久地 政嗣（平成25年度）
事業事務	同	文化財係主任	村山 みき（平成13年度）
	同	同	宮城 キミ（平成18年度）
調 査 員	同	文化財係主任	安和 吉則（平成13・18・25年度）
	同	同	仲宗根 久里子（平成18・25年度）

資料整理臨時・嘱託職員

平成13年度（臨時職員） 新里 まゆみ、運天 大介、新里 直希、吉長 聖哲、山城 久、

平成18年度（臨時職員） 北條 真子、砂川 正幸、徳嶺 里江、下里 卓也

平成25年度調査協力者

菅原 広史、鈴木 悠、宮城 かの子、池宮城 聡子、照屋 芳美、玉那覇 有登

第2章 位置と環境

第1節 位置

仲間稲マタ原近世墓群が所在する浦添市は沖縄本島の南側に位置し、東シナ海に面する西海岸沿いにあって東に西原町、南に那覇市、北に宜野湾市が隣接する。市域は東西8.4km、南北4.6kmで北を頂点に

南西と南東に広がる扇状形を呈しており、市の総面積は 19.09 k m²を測る。人口は那覇市、沖縄市、うるま市に次ぐ県下第 4 位の 113,757 人（平成 25 年 4 月末日時点）。

当墓群は浦添市のほぼ中央部付近に位置する字仲間小字稲マタ原に所在しており、同小字は字仲間の西端に近く、東に小字安田草原、西は小字仙原、南北は字安波茶、字伊祖に挟まれる。

第 2 節 自然的環境

当墓群は、浦添市で最も標高の高い浦添グスクが所在する浦添丘陵と称される石灰岩堤とその南側の中位段丘の麓に位置しており、標高は約 60～80m を測る。

表層地質は新生代第三紀中新世後期から鮮新世末期に堆積した島尻層群が卓越しており、当墓群一帯のほとんどはこの層群中の豊見城層からなる。豊見城層は砂岩と泥岩の互層からなり上部砂岩（小緑砂岩）が露出している。この砂岩は沖縄の方言で「ニービ」と呼ばれるもので固結が十分でなく侵食に弱い。泥岩は「クチャ」と呼ばれる青灰色のシルト質粘土で粘着性に富む性質を持つ。墓は丘陵斜面の砂岩層に横穴を穿って造られる掘込墓で、沖縄の方言で「フィンチャー墓」と呼ばれる造墓形式に属する。

第 3 節 歴史的環境

当墓群が所在する小字稲マタ原は方言では「ナマダーバル」と呼ばれる。明治 36（1903）年の「沖縄各間切村原名」、同 44 年「沖縄縣各間切島内各村区域並字名」では「稲俣」となっている。カタカナ表記への移行及び「原」が付いた時期とその理由は不明である。

同墓群のすぐ近くには安波茶津マタ原古墓群、同じ字仲間に仲間後原古墓群が所在している。第 2 節及び同節については「仲間稲マタ原近世墓群（2005）」が詳しいので割愛し、墓に関係する新たな発見について述べる。

06-5 号墓室に安置されていた蔵骨器から『伊祖村喜屋武筑登之女房』や『浦添村かま戸□□』、『浦添村三ら奥間』の銘書が確認された。被葬者は伊祖村や浦添（＝仲間）村の地方役人層とその関係者と思われる、当丘陵の墓地利用が窺える。また、同一丘陵上の別の墓では乾隆廿九年（＝1764 年）の銘書が確認されており、18 世紀中頃には墓地利用が開始されたと推察される。

当地は近代資料によると字仲間に属しているが、隣接する字伊祖の小字浅屋原と同様に田畑や山林、墓の土地利用となっており、当墓群はその境界付近に位置している。蔵骨器の銘書から両村名が同一の墓で確認されたことは興味深い。

引用・参考文献

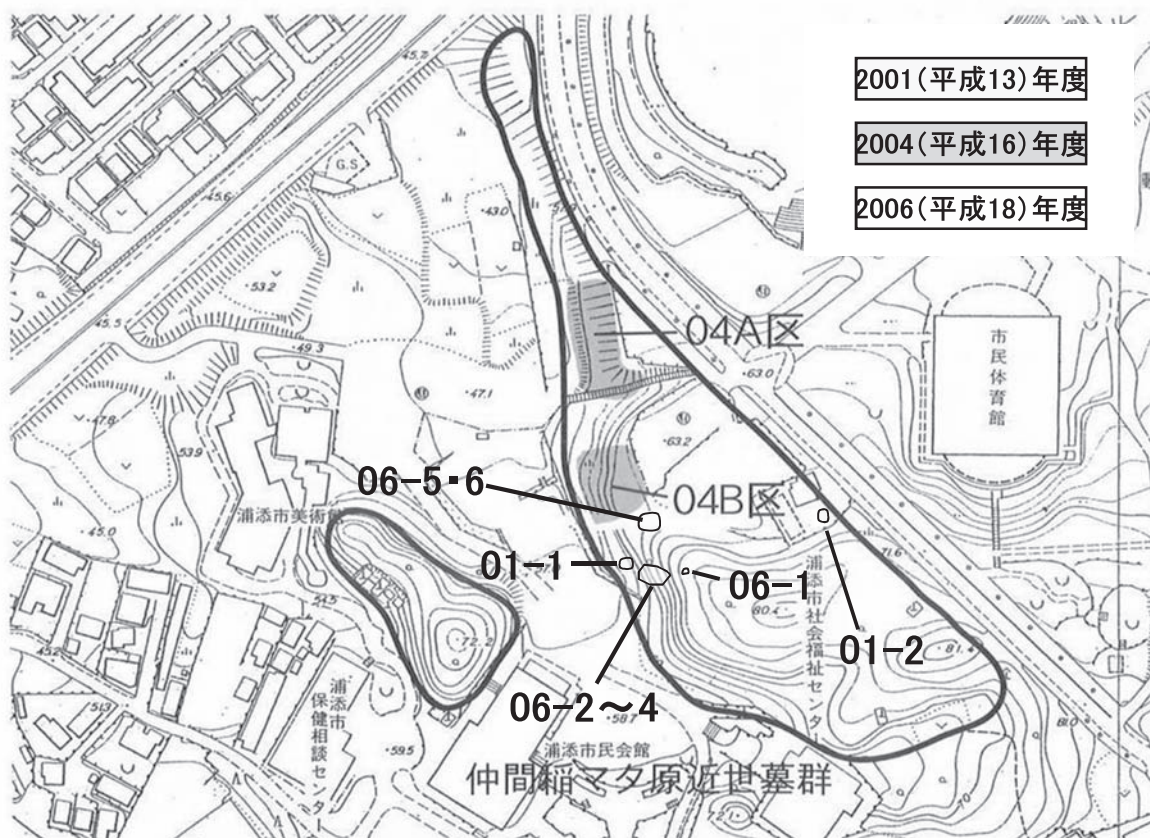
浦添市史編集委員会 1987『浦添市史 第六巻 資料編 5』浦添市

浦添市教育委員会 2005『仲間稲マタ原近世墓群 稲マタ原陣地壕群（仮称）てだこ交流文化センター建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査』

浦添市教育委員会 2007『市内遺跡発掘調査報告書（1）一平成 13～18 年度調査報告一』

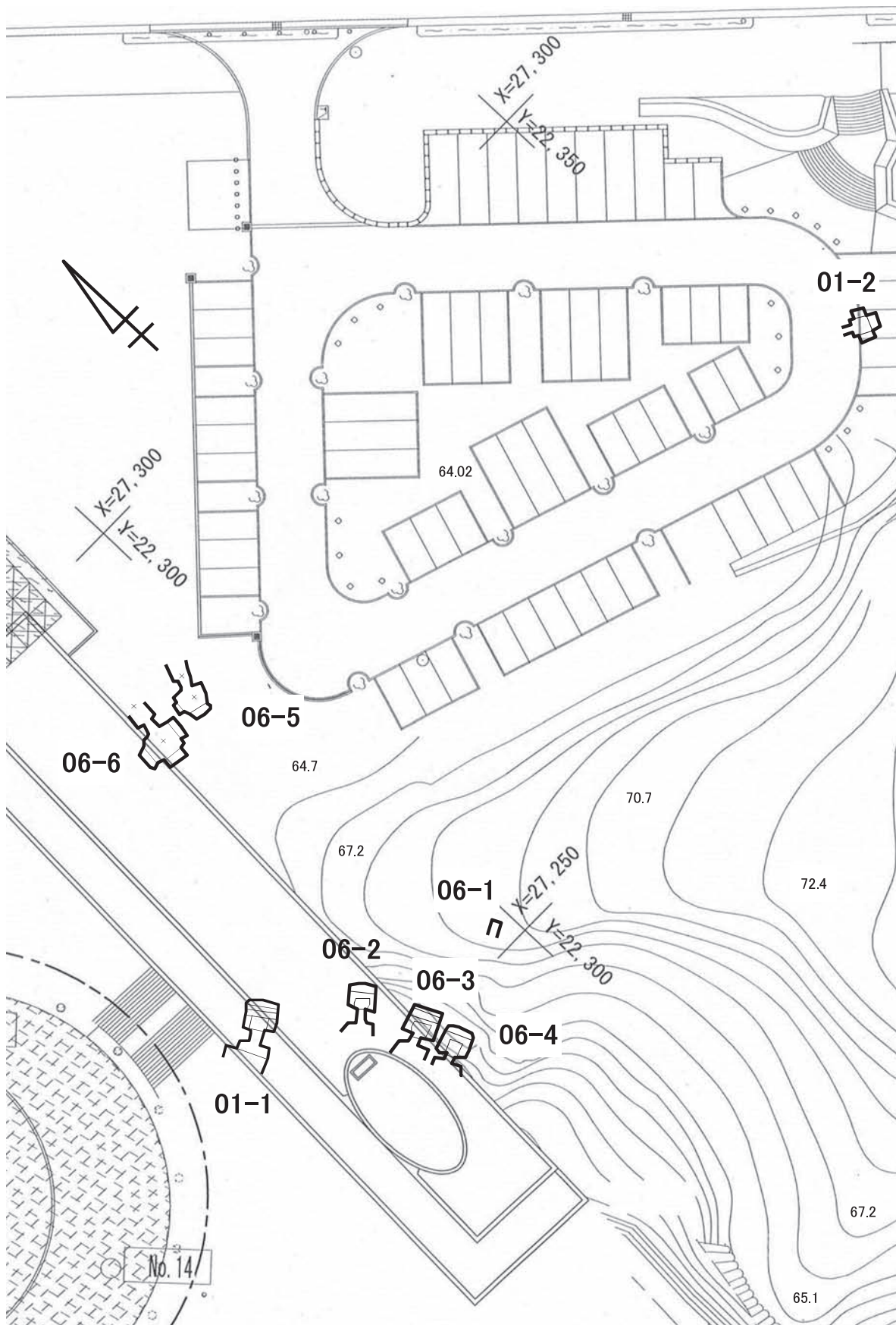


第1図 仲間稲マタ原近世墓群の位置



第2図 調査範囲

※ 墓番号01-1・2、06-1～6が今回の報告対象墓、04A・B区は2005年に報告書刊行済



第3図 調査した墓の位置

第3章 調査の概要

第1節 調査の方法

調査は2002年8月、2003年1月、2006年6～7月の期間に行った。墓数は8基のうち2基の墓(01-1・06-1号墓)は市公園緑地課、市企画振興策プロジェクトとの事前協議により記録保存の発掘調査を行った。それ以外の6基の墓は工事中の不時発見によるもので、上記両課と協議した結果、建物の設計変更が困難なことや工期の関係上やむなく記録保存による緊急発掘調査で行った。

調査の手順は着手前撮影、人力による除草・除根作業、墓室・墓庭の堆積土除去の順で進め、遺構検出後は記録作業(撮影・測量)を行った。墓は地山であるニービの基盤層を掘り込んで墓室・墓庭を構築するため地山検出によって造墓時の状態(遺構面)が比較的容易に検出できる。墓室は補修や崩落等がない限り造墓時の状態を保っていると考えられ、墓庭は経年とともに腐葉土等の堆積で遺構面が覆われていくこととなるが、この堆積層が基本的に薄いことから層位的な把握が困難で、墓庭の出土遺物を層位的に捉えられないことが多い。また、廃棄土坑等も地山面では検出できるが、使用面からの検出も先述の理由から困難となるケースが多く、今調査でも01-1号墓で同様の状況があった。

不時発見の6基の埋没墓のうち、蔵骨器が安置されていた3基墓(01-2・06-5・06-6号墓)についてみると、墓室内の攪乱等は認められないことから何らかの理由で所有者が途絶し経年とともに埋まったものと考えられた。墓は工事掘削中に墓室天井に穴が開いた状態で発見されており、墓室内には天井の崩落土や墓室外からの泥土流入によって棚近くまで土が堆積し、墓庭も墓正面と同じ高さまで埋まっていた。調査は墓庭堆積土の除去を地山近くまで重機で行い、その後人力掘削に切り替えて遺構面の検出作業を行った。いずれの墓も墓庭は戦後の造成等による攪乱をうけており、その範囲や参道等を確認することはできなかった。遺構検出後は記録作業を行い、調査を終了した。

第2節 遺構

調査墓数は8基で全て掘込墓(フィンチャー墓)であった。なお、墓番号は既報告の「仲間稲マタ原近世墓群」に準じ、調査した西暦年度の下二桁と調査した順番を組み合わせて番号を付している。

注目される遺構としては、出窓状棚を有する3基墓(01-2・06-5・06-6号墓)の墓室内で検出されたブタ頭骨の埋納土坑が挙げられる。検出場所は汁ヒラシの正面棚直下1例と墓室左隅2例で、残存状態は悪く1例のみ頭位が墓室奥壁に向くことが確認できたが、他の頭位は不明であった。

各墓の遺構の詳細については次章の調査の成果で述べるが概要を第1表にまとめ、要約を以下で記す。

01-1号墓では、墓庭で土坑が検出されており木製品の焼却廃棄跡と推察される。

01-2号墓では、汁ヒラシ中央部に未加工石(石灰岩)の集石があった。石の大きさは概ね30cm前後で14個あり本来は墓口の閉塞石と考えられた。類例は知りえないが、墓口の閉塞方法を積石から一枚板石に変更した際に不用石を集積したものと解している。

06-2～4号墓は横並びで所在する空き墓である。2号墓では、棚の一部やサンミデー、棺箱を置く台石にニービ石を使用している。3号墓では、墓口やサンミデーが石灰岩の切石組で構築されており、土坑(棺箱を置く台石跡)が検出されている。4号墓は壕に転用されており、墓口や棚の改変が認められた。

06-5号墓は棚が出窓状で正面と右棚のみ構築される。06-6号墓とは横並びで所在する。

06-6号墓では敷石によるサンミデーや暗渠が検出されている。棚は出窓状(正面左右に棚を構築)。

第1表 出土遺構一覧表

墓 番号	墓室 類型	汁ヒラシ 面積(m ²)	墓口 方位	墓口寸法(m)			墓口の閉塞方法 ①形状 ②材質	サンディー 有無	庭囲い 有無	排水溝 有無	蔵骨器 有無 点数
				高さ	幅	奥行					
01-1	5b	1.41	N113° W 西南西	0.9	0.6	1.2	蓋石 ①一枚板状 ②石灰岩	○	○	×	×
01-2	2b	2.25	N55° W 北西	1.0	0.75	0.7	蓋石 ①一枚板状 ②砂岩	?	○	×	○ 11
06-1	1c	0.96	N142° W 南西	0.9	0.6	1.6	-	×	○	×	○ 3
06-2	5a	1.17	N130° W 南西	0.9	0.6	1.2	-	○	×	×	×
06-3	5c	1.8	N112° W 西南西	0.9	0.6	0.8	-	○	○右	×	×
06-4	5a	1.69	N110° W 西南西	-	- (1.0)	0.8	-	?	○左	×	×
06-5	2b	2.21	N10° W 北	1.2	0.7	0.6	積石 ②石灰岩、砂岩	×	×	×	○ 6
06-6	2b	3.84	N8° W 北	0.7 (1.2)	0.65	0.7	積石 ②石灰岩、砂岩	?	×	○	○ 6

第3節 遺物

遺物は、総計 59 点で、墓毎の出土遺物の内訳を第 2 表に示した。主たる遺物は蔵骨器（蓋、身、転用品を含む）で総数は 50 点。副葬品と思われる遺物は 4 点で瓶や小杯、簪等が得られた。釘が蔵骨器内から得られているが改葬の際に紛れ込んだものと推察された。このほか 01-2・06-5・06-6 号墓の汁ヒラシで埋納土坑が検出されており土坑内からブタ頭骨が出土している。

蔵骨器の身を種類ごとにみると、ボージャー厨子甕 17 点、マンガン釉甕形厨子甕 6 点、石厨子と赤焼御殿型厨子甕、転用蔵骨器が各 1 点であった。

注目される遺物としては 06-6 号墓の蔵骨器 No. 4 の蓋が挙げられる。No. 4 の身は陶製のボージャー厨子甕であるが、そのセットとなる蓋はサンゴ石製で特異な形状を呈する。寸法は直径 28 cm、器高 13.8cm で立面観は下部が円筒状、上部が入母屋形を呈しており、入母屋部分の輪郭や縁部を墨？で彩色する。内面はベタ底の皿を逆さにするように浅く削り、外縁端部を高台状に仕上げる。わずかに鑿痕が認められる箇所もあるが全体的にみると外面は丁寧に調整されている。内面の鑿痕は明瞭で鑿幅は 1.6cm を測る。全体的に 2~9mm の自然孔がみられる。当蓋の類例としては同材質・異形状・別遺跡出土だが資料整理中の遺物で 1 点確認されている。その蓋は前田・経塚近世墓群下平良大名原地区 55 号墓出土遺物で、ボージャー厨子甕の蓋が模倣されており、頂部のつまみを碁石状に削り出すなど精巧に作られている。

いずれにしても類例が少ないのは陶製蔵骨器に比べて生産化に向かない材質によるものと容易に想像されるが、被葬者集団の地位や財力が反映された特注品または被葬者自身の生業に関係するなんらかの理由で作られた可能性も推察される。単に陶製蓋が破損したため応急的に代用品として作られた可能性も考えられ、現時点では不明と言わざるをえないため同様の事例の増加を待つて検討したい。

第2表 出土遺物一覧表

墓 番号	石厨子		ボージャー		マンガ		赤焼御殿型		上焼御殿型		転用品		瓶	銭貨	簪	釘	獣骨	集計
	蓋	身	蓋	身	蓋	身	蓋	身	蓋	身	蓋	身						
01-1									2									2
01-2			5	7	3	3	1	1						1	1	1	1	24
06-1					3	3												6
06-2																		0
06-3																		0
06-4																		0
06-5	1	1	5	5									1				1	14
06-6			4	5							1	1	1				1	13
集計	1	1	14	17	6	6	1	1	2	0	1	1	2	1	1	1	3	59

第4章 調査の成果

発掘調査で8基の墓が検出されており、そのうちの特に遺構・遺物の残存状態が良好で特徴的な3基の墓について詳細を報告していく。図示しない5基の墓については詳細のみ以下で述べていく。なお、墓室寸法や計測位置については凡例を参照いただきたい。

第1節 01-1号墓

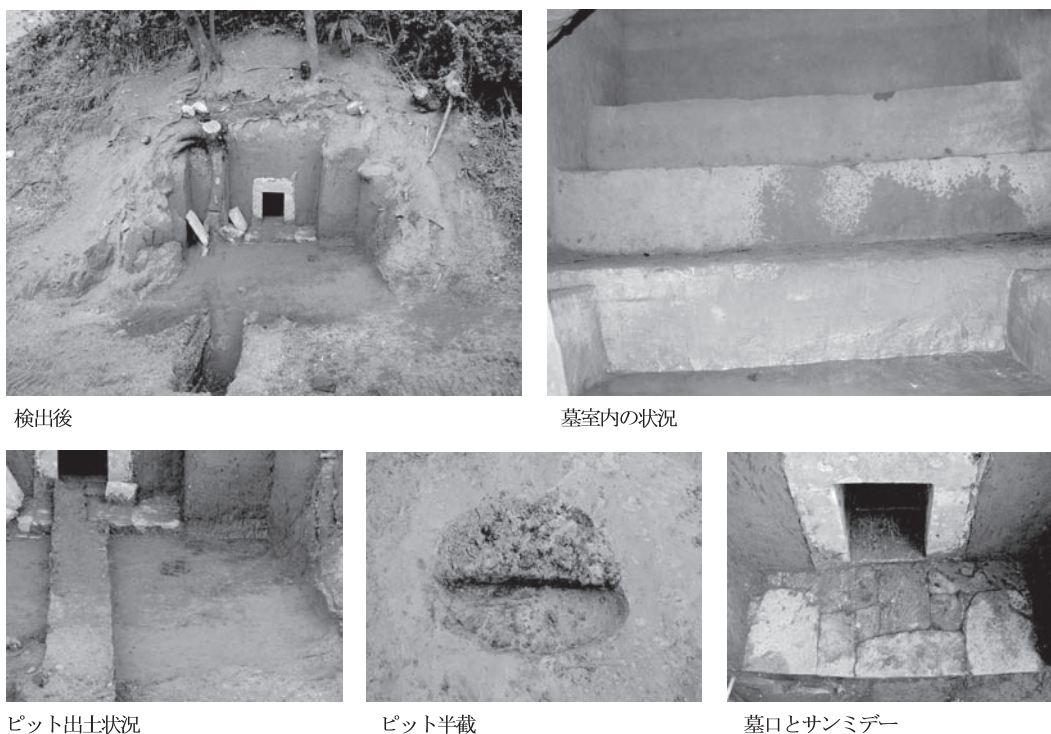
墓は基盤である砂岩層を掘り込んで墓庭、庭囲い、袖石、墓口、墓室を成形している。墓口前には石灰岩の敷石でサンミデーを構築し、ヤジョーマーイやチジ、マユ等は欠くものの外観は亀甲骨をやや意識した造りにみえる。墓口は調査時には既に開口しており、室内は空っぽの状態であった。サンミデーや墓庭の傍らには石灰岩製の蓋石や香炉石が置かれていた。墓口の寸法は幅 63 cm、高さ 93cm、奥行き 1.2mで、石灰岩を方形に加工して嵌め込んで構築する。サンミデーの寸法は横幅 1.45m、奥行き 95 cm、高さ 16 cmを測る。

墓室は棚（正面3段・左右1段）と汁ヒラシで構成されており、正面棚と左右棚の接地部分は段差がついている。墓室の平面観は正方形で、寸法は奥行き 2.4m、幅 2.4m、最大高 1.9mを測る。汁ヒラシの上方（天井）に砂岩ノジュールの突出があり、高さが部分的に制約されている。

墓庭でピットが検出されており、炭化した細かい木切れが土と混在する状況が確認された。詳細は不明だが棺箱や死装束を焼却して埋める報告（註）に近似する状況が推察された。検出地点はサンミデー手前の中央より左庭囲い側。ピットの平面観は隅丸方形で大きさは直径 38 cm、深さ 5 cm。深さが 5cm と浅いため、本来はある時期の墓庭使用面（二次堆積土含む）から掘り込まれたものと思われるが、その検出には至らなかった。

（註） 玉木順彦 1989 「史料に見る沖縄の葬墓」『シンポジウム 南島の墓 沖縄の葬制・墓制』沖縄県地域史協議会編 p 228～230 嘉徳堂規模帳

図版 1



第2節 01-2号墓

当墓は工事の機械掘削で墓室天井が削平され、穴が開いた状態で見つかった。発見直後の工事関係者からの聴取によると天井崩落土は棚上まで達しており、棚上に蔵骨器が7点確認され、蓋は右棚の1点を除いて全て汁ヒラシの埋土上に落下していたようである。文化課職員が現場立会いした際には汁ヒラシの堆積土が半分程除去されており蓋も工事関係者によって戻されていた。その時点で蔵骨器は4点増えて11点確認された。このような状況から発掘調査で蓋と身のセット関係が明らかなものは上下に並べて図示したが、判然としないものについては個別に取り扱っている。

墓は基盤である砂岩層を掘り込んで墓庭、庭囲い、墓口、墓室を構築する。墓庭は約2mの堆積土に覆われ、攪乱等もあって明確な範囲は不明であった。庭囲いは両側にあり墓正面とほぼ同じ高さとなる。

墓口は、造り方が特徴的で羨道がストレートにならずに開口部が墓室側に比べてやや広くなる。羨道途中の上部壁と側壁を断面「L」字形に成形するため正面から見ると墓口にレリーフが意匠されているように見える。寸法は高さ1m、幅75cm、奥行き70cmを測る。閉塞には細粒砂岩ノジュールを一枚板状に加工した蓋石を使用している。蓋石の寸法は縦93cm、横63cm、厚さ7cm。蓋石が前後に転倒しないように墓庭側には石灰岩製の香炉石を、墓室側には長楕円形状の砂岩ノジュールが置かれていた。香炉石の寸法は縦42cm、横62cm、厚さ20cm。墓口の寸法に比べて蓋石や香炉石が小さいため墓口に隙間が出来ており、隙間には拳大ほどの石灰岩と青灰色粘土（クチャ）が充填されていた。このほか、墓口前に数個の石灰岩の並びが検出され、埋土と縁石でサンミデーを構築した可能性が推察された。

図版2



正面棚	左 棚	右 棚
門 番	墓口の検出状況 (墓庭側より撮影)	墓口の検出状況 (墓室内より撮影)
閉塞状況		

墓室は出窓状の棚（正面左右）と汁ヒラシからなる。寸法は奥行き 2.45m、幅 2.75m、最大高 1.5m（天井崩落のため残存部計測）を測る。棚の平面観は全て方形で丁寧に造られている。特に正面棚は精緻に造られており、左右壁面に逆L字形の高浮き彫りが意匠される。蔵骨器は正面棚に 5 点、右棚に 2 点、左棚に 3 点安置されているが、どの棚もこれ以上の蔵骨器が追加できるスペースは無い状態となっている。

汁ヒラシについてみると、平面観は正方形で寸法は 1.5m を測る。汁ヒラシは遺体を一定期間安置（一次葬）する場所であるが、ここで土坑と集石が検出された。土坑は正面棚直下に位置しブタの頭骨を埋納していた。平面観は隅丸方形で、直径 40 cm、深さ 15 cm で地山を掘り込んでいる。土坑内に攪乱等は無いが、骨は分離状態で検出されたため頭位は不明であった。集石は汁ヒラシのほぼ中央に位置し 14 個の石灰岩がまとまって検出された。大きさは 20～30 cm 程度で加工痕は無く、当地で産出する石では無いため意図的に持ち込まれたものである。汁ヒラシでの用途を考えると棺箱の台石が考えられたが、その場合加工された台石が主流となること、また、石の個数も 4 個（または 2 個）となる事例が多いため断定し難く、未加工である点に注目すると墓口での使用が着想され、墓口の閉塞石（積石）が一枚板状の蓋石に変更された際に不用となり墓室内に持ち込まれたものと推察された。この推察が仮に正しいのであれば、不用石を墓室中央に集積する状況と、棚に蔵骨器の追加スペースが無い状況を併せて考えると、七代または十代で閉めるとされる「神御墓」とみると辻褄が合うように思われた。しかし、民俗事例でいわれる神御墓の実例を知らないため、現段階では可能性の提示に留めておくこととする。

このほか、墓室内の羨道と汁ヒラシの間から検出された蔵骨器は、長年月経て洗骨した場合、汁ヒラシに再び門番として安置するとされる民俗事例に一致する事例と考えられる。

遺物は蔵骨器 11 点のほか蔵骨器内から小杯や簪、銭貨、釘等が得られた。蔵骨器の種別はボージャー厨子甕 7 点、マンガン釉甕形厨子甕 3 点、赤焼御殿型厨子甕 1 点であった。厨子甕の銘書では「乾隆廿九年洗骨」が確認されており、当墓の造墓年或使用期間を知るうえでの手掛かりといえる。

※ 乾隆 29 年 = 1764 年

図版 3



着手前



堆積土除去後



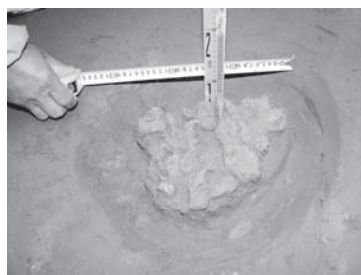
埋納土坑検出後



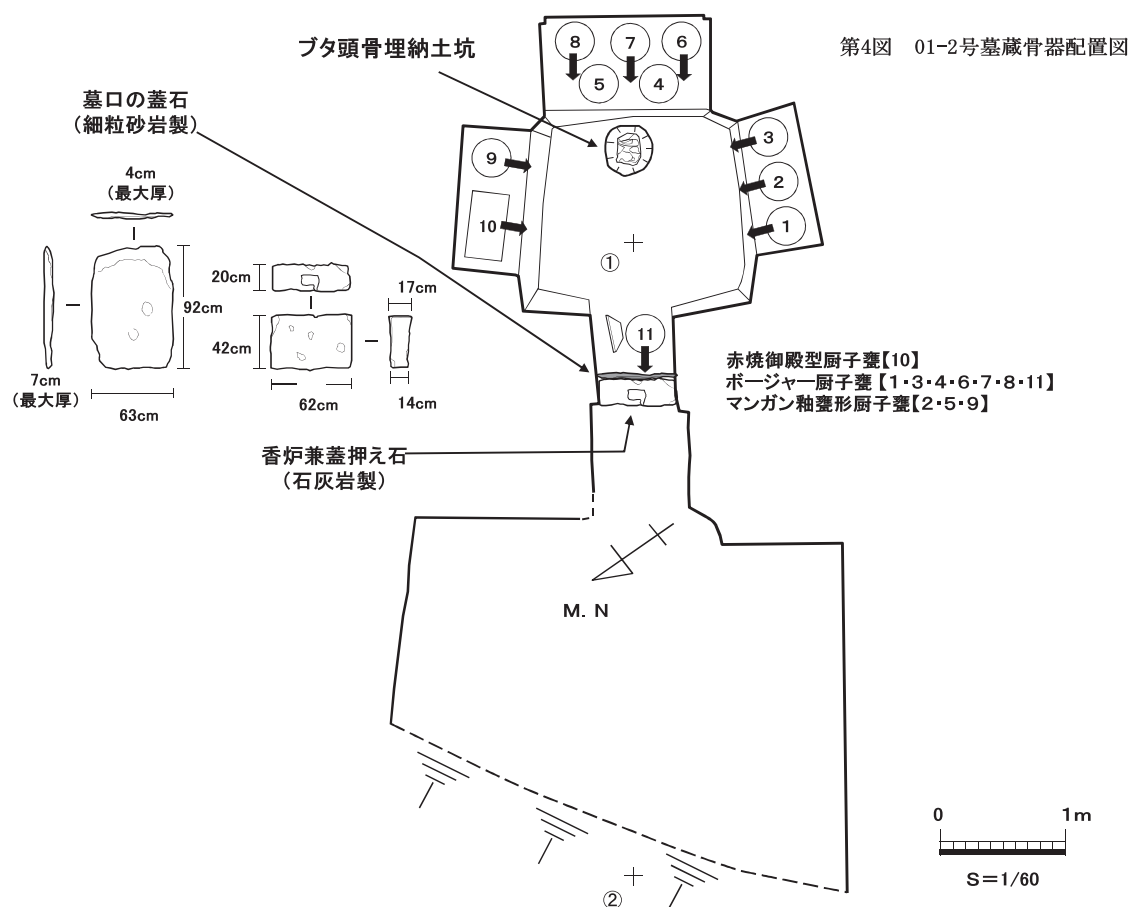
墓庭の検出作業



完掘後

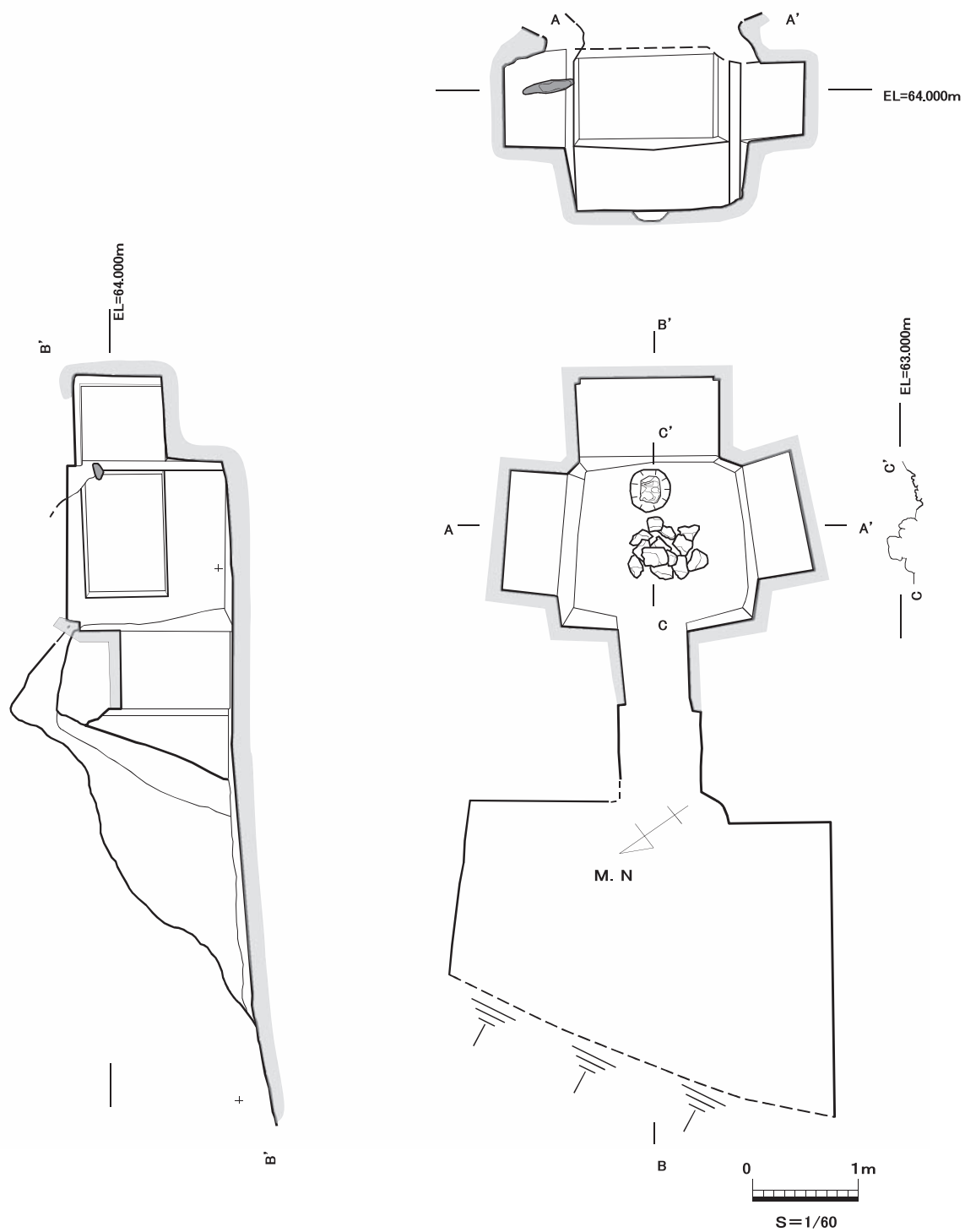


同上



第3表 01-2号墓遺構観察表

立地場所 の基盤	外 観 形 式	墓口		庭の構築方法 墓の位置(座標)	サンデー の有無	墓室		棚数	特徴等
		構築 方法	奥行			平面 形態	奥行	正面	
			幅				幅	左	
			高さ				高さ	右	
小祿砂岩	掘込墓	基盤を掘り込む	70	断面L形に基盤を削平。庭の範囲は攪乱により不明。 ①x=27266.530 y=22357.219 ②x=27269.052 y=22352.912	？	方形	225	1	墓室に蔵骨器11点安置。正面左右壁を方形に掘り抜き出窓状に棚を造る。棚間を削り出し柱状に区画。正面棚は丁寧に成形され、左右壁面に基盤削り出しで逆「L」字状のレリーフ(高浮き彫り)を施す。汁ヒラシから棚までの高さは55cm。正面棚直下でブタ頭骨埋納土坑検出。墓口の蓋石は砂岩製一枚板。蓋石は石灰岩製香炉兼押さえ石。墓口と蓋石の隙間を埋めるように拳大の石灰岩塊、青灰色粘土(クチャ)を充填して塞ぐ。汁ヒラシ中央に30cm程の石灰岩塊を14個集石。
			75				275	1	
			100				150	1	



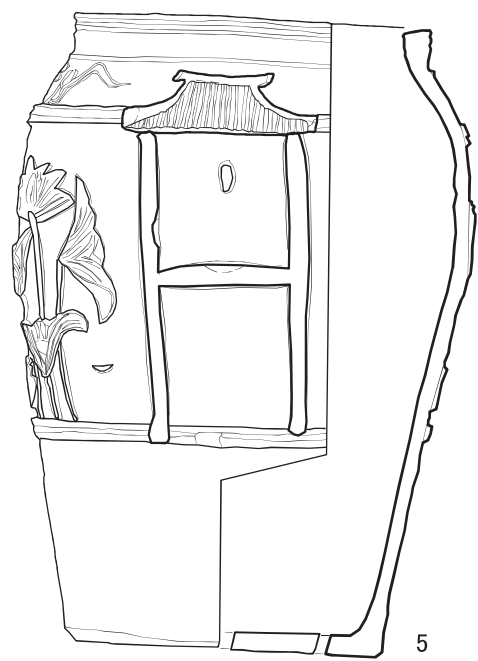
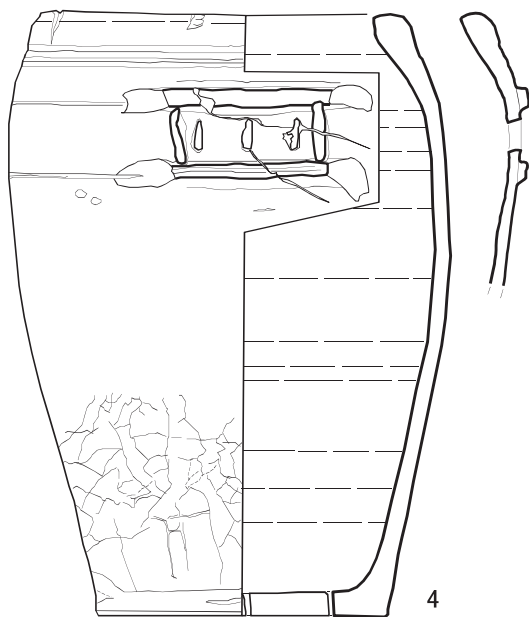
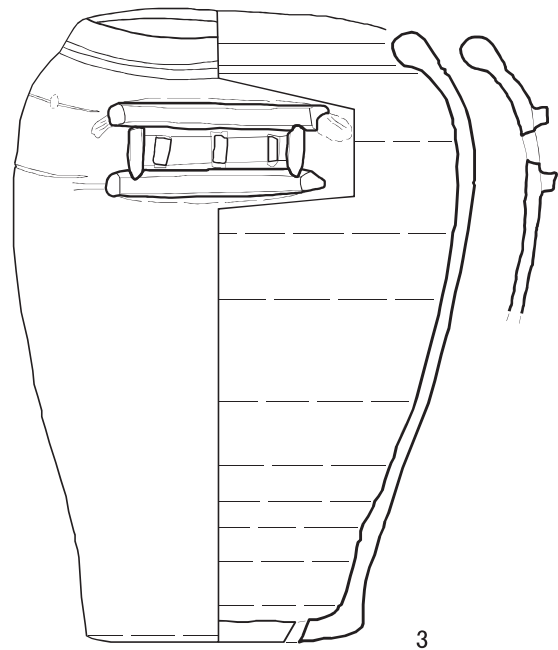
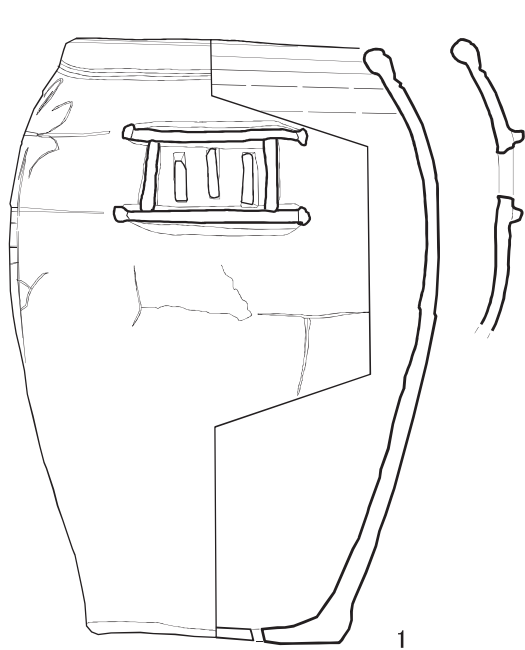
第5図 01-2号墓遺構図

第4表 01-2号墓出土遺物（蔵骨器）観察表1

蔵骨器 No.	名称	型式	寸法 cm				観察所見 ①つまみ・マド枠 ②文様 等 ③色調 ④その他	銘書	被葬者			備考
			口径(身) 直径(蓋)	器高(身) 高さ(蓋)	胴径	底径			人数	性別	年齢	
1	ボージャー (身)	Ⅱa	23.5	47.6	33.0	22.0	①平葎形、1方2方 ②頸部沈線2条、底 部孔13個、両側面に 蓮華文(沈線) ③外 面5YR4/1【褐灰】、内 面10R5/3【赤褐】	-	1	不明	不明	
2	マンガン (蓋)	-	24.6	15.4	-	-	①有孔、有台 ②櫛 描で多条沈線を5箇 所に施す ③外面 2.5YR5/3【にぶい赤 褐】、内面2.5Y5/1 【赤灰】	未八月廿六日 嶋袋ノかまと 嶋袋	-	-	-	
	マンガン (身)	Ⅲ	30.1	55.0	36.7	22.2	①アーチ形 ②蓮華 文(貼付)、横帯3・4 突帯、底部孔5個 ③ 外面10R4/1【暗赤 灰】、内面10R5/4【赤 褐】	-	2	不明 不明	成人 成人	椎骨に骨棘 形成が認め られる
3	ボージャー (身)	Ⅳ	26.0	48.5	36.0	21.5	①平葎形、1方2方 ②頸部沈線3条、底 部孔5個 ③外面 5YR4/1【褐灰】、内面 N4/0【灰】	-	1	不明	成人	
4	ボージャー (身)	Ⅳ	28.5	48.0	34.7	22.6	①平葎形、1方2方 ②頸部沈線3条、底 部孔6個 ③外面 7.5YR5/2【灰褐】、内 面2.5YR4/1【赤灰】 ④正面胴下部に貫入 状の細かいヒビ	-	1	不明	成人	
5	マンガン (身)	Ⅱ	27.5	49.5	35.8	24.2	①瓦屋形 ②蓮華文 (貼付)、横帯3・4突 帯、柱貫、底部孔6個 ③外面10YR4/1【褐 灰】、内面10R4/4【赤 褐】	-	1	不明	熟年?	
6	ボージャー (身)	Ⅲa	27.0	51.0	36.8	21.1	①平葎形、1方2方 ②頸部沈線2条、底 部孔6個、判有り ③ 外面7.5YR4/1【褐 灰】、内面10R4/1【褐 灰】 ④口唇部に貝 目痕、底部は焼き膨 れ歪む、付着物多量	-	2	不明 不明	成人 成人	焼骨
7	ボージャー (身)	Ⅲa	26.0	52.0	36.0	22.0	①平葎形、1方2方 ②頸部沈線2条、底 部孔5個 ③内外面 10R4/1【褐灰】 ④口 唇部に貝目痕、底部 は焼き膨れ歪む、器 表面に付着物多量	-	1	不明	不明	
8	ボージャー (身)	Ⅱa	30.0	52.0	41.0	21.4	①平葎形、1方2方 ②頸部沈線3条、底 部孔6個、身正面に 蓮華文(沈線) ③外 面2.5YR5/2【灰赤】、 内面10R5/4【赤褐】	-	2	不明 不明	成人 幼児	
9	マンガン (身)	Ⅱ	25.8	53.7	37.2	25.3	①瓦屋形 ②横帯3・ 4突帯、底部孔6個、 蓮華文(貼付)、両側 面に葉文(沈線) ③ 内外面10R4/1【褐 灰】、胴下部から底部 は無釉	-	1	不明	熟年?	

第5表 01-2号墓出土遺物（蔵骨器）観察表2

蔵骨器 No.	名称	型式	寸法 cm				観察所見 ①つまみ・マド枠 ②文様 等 ③色調 ④その他	銘書	被葬者			備考
			口径(身) 直径(蓋)	器高(身) 高さ(蓋)	胴径	底径			人数	性別	年齢	
10	赤焼御殿型 (蓋)	-	長径47.2 × 短径36.3	26.6	-	-	①入母屋形 ②棟に 鯰1対、屋根上に獅 子4頭(貼付) ③外 面5YR6/3【にぶい 橙】、内面2.5YR6/6 【橙】 ④胎土に靱 殻？を含む	-	-	-	-	縮尺
	赤焼御殿型 (身)	-	長径45.2 × 短径31.6	42.8	-	45.8 × 32.5	①唐破風形、1方2方 ②底部孔13個、法師 像正面1対両側面1 体(貼付) ③外面 7.5YR7/3【にぶい 橙】、内面2.5YR6/6 【橙】 ④胎土に靱 殻？を含む	-	2	不明 不明	不明 不明	
11	ボージャー (蓋)	Vb	32.6	10.0	-	-	①無孔 ③内外面 2.5YR6/4【にぶい橙】	乾隆廿九年 甲申七月七日 洗骨かめ嶋袋	-	-	-	※ 1764年
	ボージャー (身)	Ⅲa	30.5	52.3	39.0	24.0	①平葺形、1方2円 ②頸部沈線2条、底 部孔10個、判有り ③外面5YR5/2【灰 褐】、内面N5/0【灰】	-	1	不明	熟年？	
12	ボージャー (蓋)	Ⅱa	30.2	13.7	-	-	①有孔、有台 ②体 部に波状文2本(沈 線) ③外面5YR5/1 【褐灰】、内面10R5/3 【赤褐】	-	-	-	-	
13	ボージャー (蓋)	Ⅲb	32.0	12.3	-	-	①有孔 ③外面 5YR5/2【灰褐】、内面 10R5/4【赤褐】 ④外 面上部回転ヘラ削 り、下部回転横ナデ、 内面ミズビキ後回転 横ナデ	-	-	-	-	
14	ボージャー (蓋)	Vb	30.1	11.3	-	-	①無孔 ③内外面 10R5/3【赤褐】	-	-	-	-	
15	ボージャー (蓋)	Vb	31.0	11.3	-	-	①無孔 ③外面 2.5YR5/3【にぶい赤 褐】、内面10R5/4【赤 褐】	-	-	-	-	
16	ボージャー (蓋)	Vb	30.9	10.7	-	-	①無孔 ③内外面 10R5/4【赤褐】 ④破 裂箇所(焼成時)に石 灰粒(6mm)	-	-	-	-	
17	ボージャー (蓋)	VII	30.5	7.5	-	-	①無 ③外面 2.5YR5/3【にぶい赤 褐】、内面10R5/4【赤 褐】 ④外面上部回 転ヘラ削り後雑なナ デ、下部回転横ナデ	-	-	-	-	
18	マンガン (蓋)	-	22.1	12.6	-	-	①有孔、有台 ③外 面10R4/1【暗赤灰】・ 内面10R5/2【赤褐】 ④器表面に溶着物(3 ～10mm)が点在、鏽 部はやや歪む	-	-	-	-	
19	マンガン (蓋)	-	22.4	14.5	-	-	①有孔(貫通)、有台 ③刷毛で薄釉、外面 2.5YR5/3【にぶい赤 褐】・内面2.5Y5/1【赤 灰】 ④石灰粒(1～ 3mm)点在	-	-	-	-	



0 S=1/6 30cm

第6図 01-2号墓出土遺物(蔵骨器1)



1



3



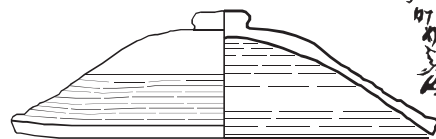
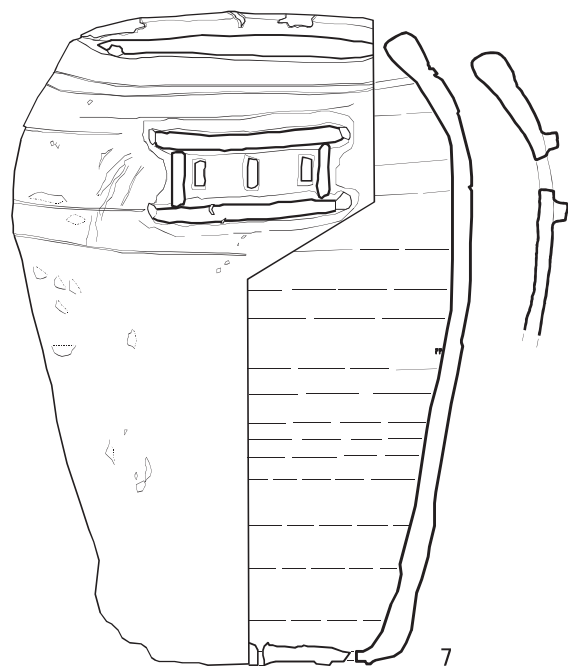
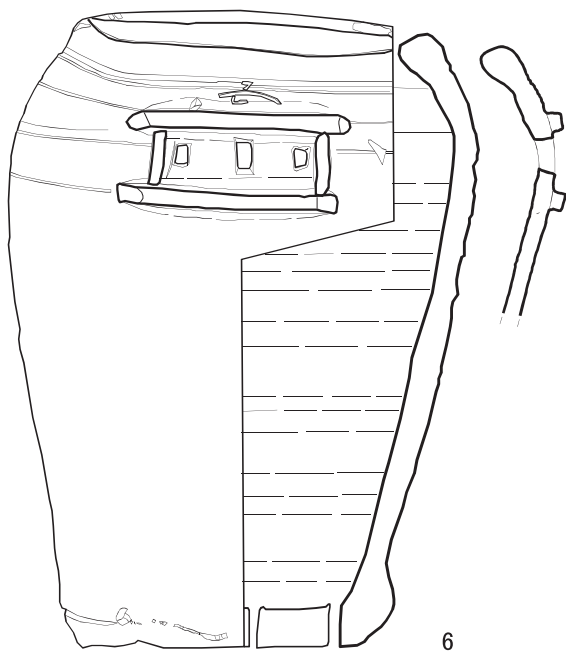
4



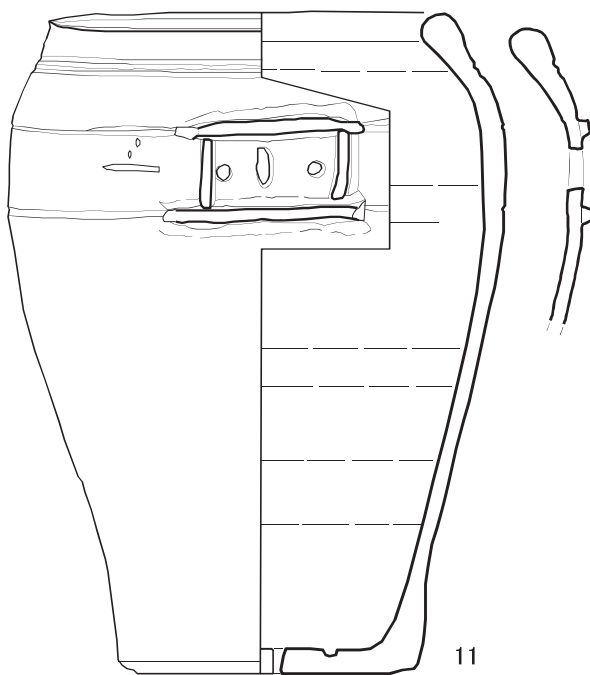
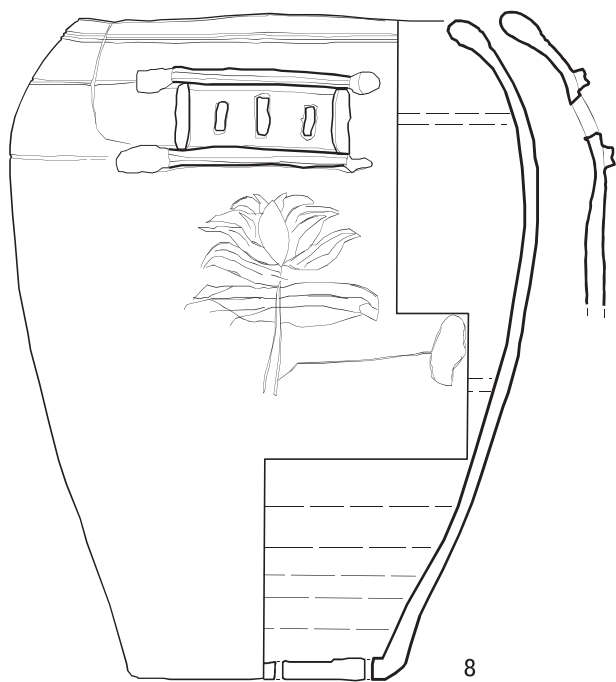
5



图版4



乾
隆
己
未
年
七
月
廿
日
沈
芳
軒
印



0 S=1/6 30cm

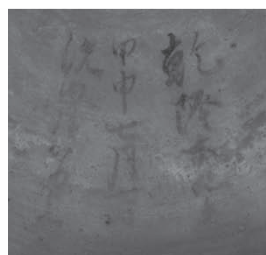
第7图 01-2号墓出土遗物(藏骨器2)



6



7



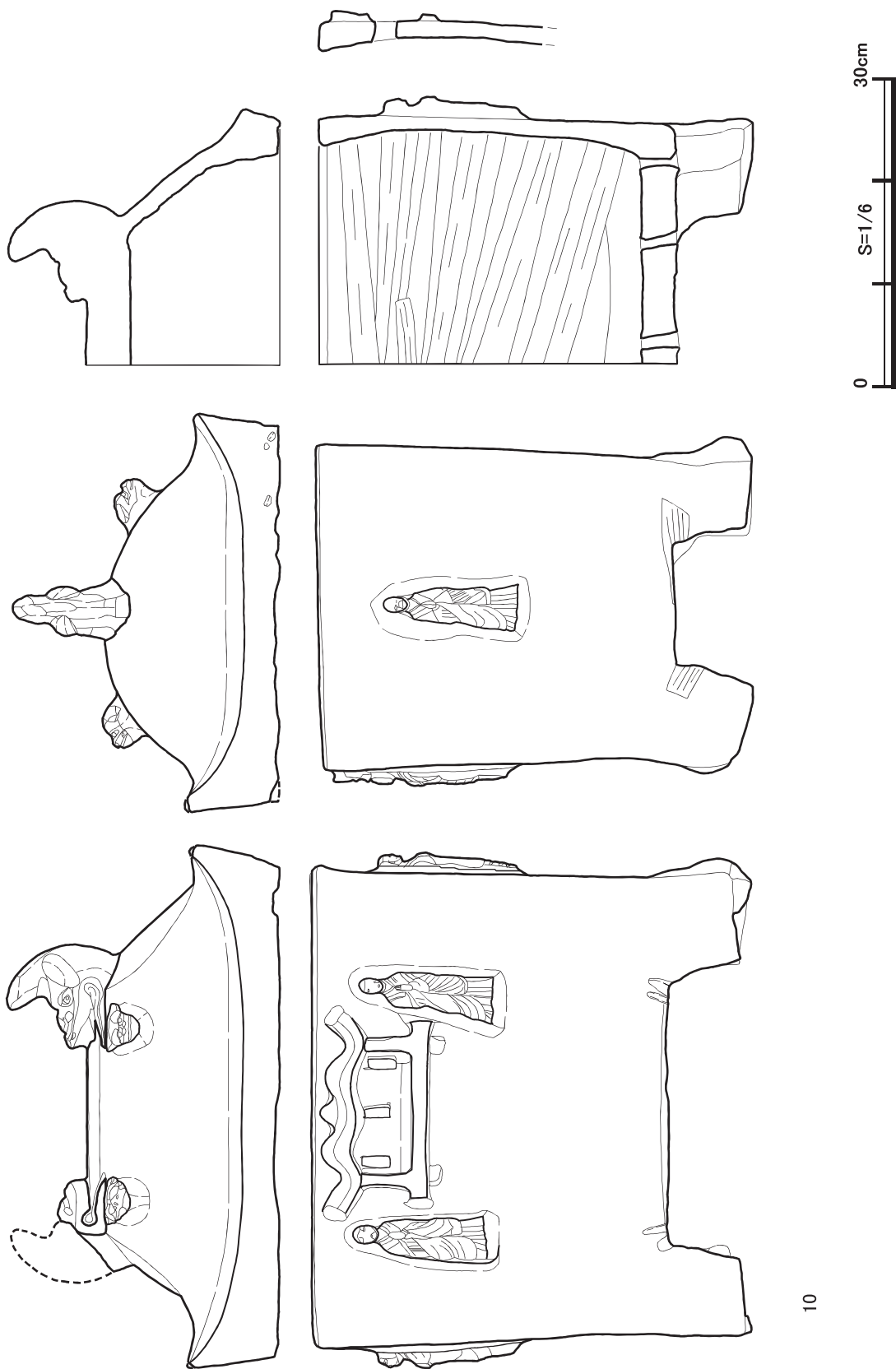
8



11



图版5

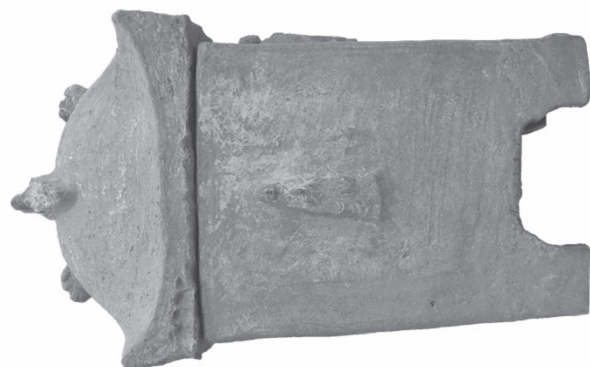


10

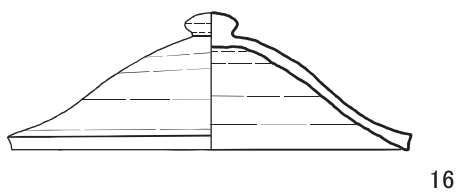
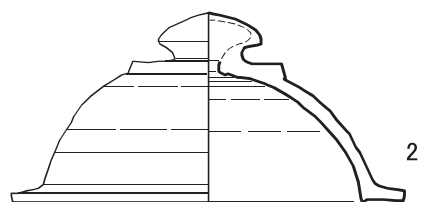
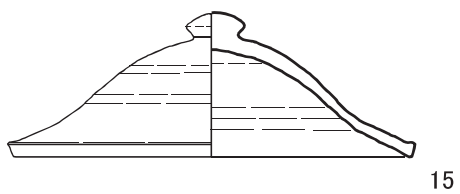
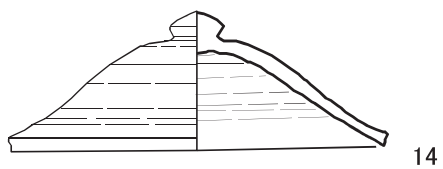
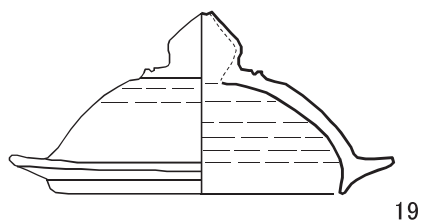
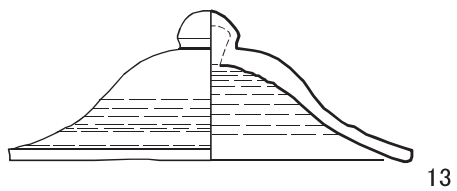
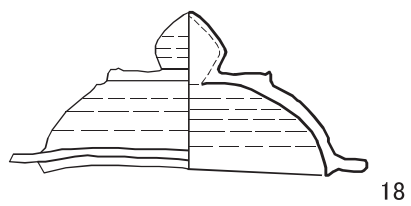
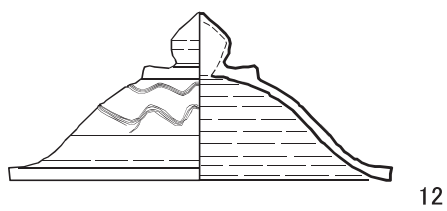
第8图 01-2号墓出土遺物(藏骨器3)



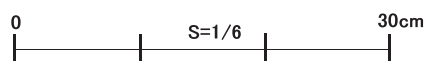
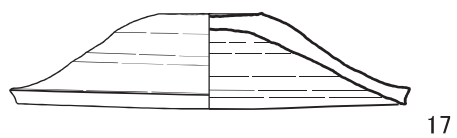
10



图版6



未八月廿六日
漢城一
漢城一



第9図 01-2号墓出土遺物(蔵骨器4)



12



18



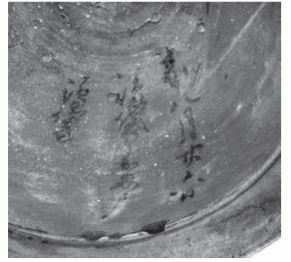
13



19



14



15



16



2



17

图版7

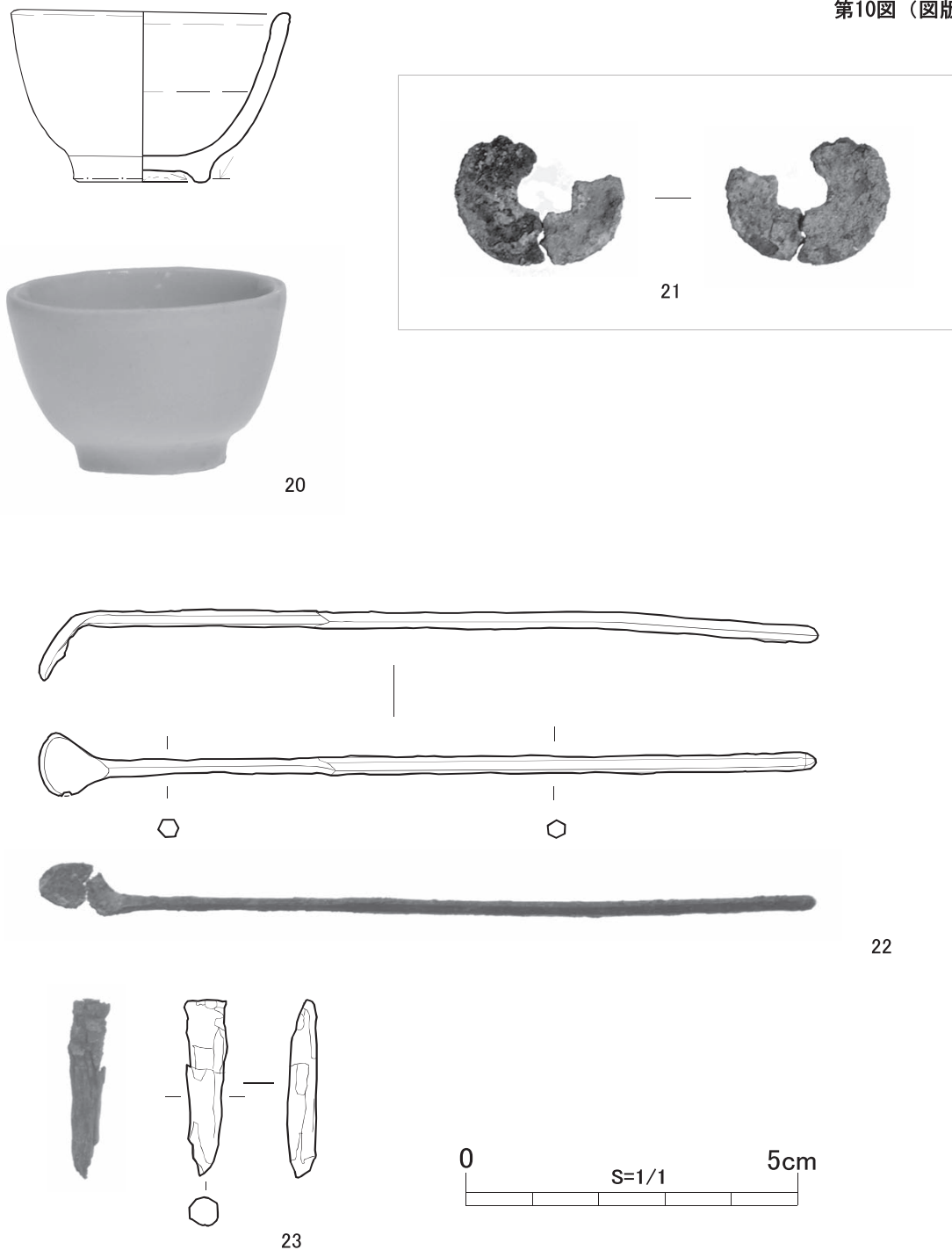


9



图版8

第10図（図版9）



20は、18世紀から19世紀前半頃に推定される徳化窯系白磁小杯の完形品で、蔵骨器No. 6に副葬されていたものである。器面全体に透明釉を施し畳付に砂目が付く。口径4.4cm、器高2.7cm。

21は、銭貨で破損及び欠損（1/4）し、表裏面の錆も著しく文字の判読不能。

22は、銅製の簪で全長12.1cm、重量3g。匙形で首、竿部とも断面六角形である。

23は、鉄製の釘で蔵骨器No. 3から見つかったものである。改葬（納骨）時の混入と考えられ、棺箱に使用された釘と思われる。頭部と基部先端は欠損する。全体的に錆も進行しており残存状態は不良である。全長2.7cm、重量1.7g。

第3節 06-1号墓

墓は基盤である砂岩層を掘り込んで墓庭や庭囲い、墓口、墓室を成形する。墓庭や墓室は堆積土に覆われており、墓口上部が半分程度開口した状態であった。墓口の寸法は幅 60 cm、高さ 90cm を測る。閉塞方法は不明。庭の寸法は幅 2.2m、奥行き 1m で、平面観は横長の方形状を呈する。

墓室についてみると、平面観は縦長の方形状を呈しており棚は無い。寸法は墓口の縦横幅でストレートに奥へ掘り込み、奥行きは 1.6m を測る。

遺物は、遺骨の入っていない蔵骨器が墓室奥側で 3 点検出された。蔵骨器には銘書が墨書されており、明治 34 年に死者の出たことや同日に以前の被葬者を洗骨したこと、子供も大人と同じ様に一次葬を行い洗骨していたことが確認された。

当墓は一次葬人骨を安置する仮墓のような墓室形状をしており、廃棄された厨子甕の状況からすると短期間の使用目的で造られたものと推察された。

図版 10



調査地遠景

検出後

室内状況

第4節 06-2号墓

当墓も工事中に発見された墓であったが、蔵骨器の無い空き墓であった。当墓から 06-4 号墓までの 3 基は横並びする墓で、移転廃棄された空き墓と判断された。

墓は基盤である砂岩層を掘り込んで墓庭と庭囲い、墓口、墓室を成形する。庭囲いは隣に所在する 06-3 号墓側のみ造られる。墓口の寸法は幅 60 cm、高さ 90cm、奥行き 1.2m で、閉塞方法は不明。墓口の下部には加工した石灰岩を敷石し、墓口前には加工したニーピ石を組み合わせてサンミデーを構築する。サンミデーの寸法は横幅 1.45m、奥行き 95 cm、高さ 16 cm を測る。

墓室の平面観はほぼ正方形で奥行き 2.25m、幅 2.35m、高さ 1.9m を測る。棚は「コ」字状で正面棚は 2 段を数える。正面棚と左右棚は高さが同じで平坦になる。棚は 1、2 番棚ともに地山成形と加工石材を組み合わせて構築する。特に 2 番棚で顕著にみられ、縁辺部に石灰岩 2 個とニーピ石 5 個を用いて平坦に仕上げる。棚の縁辺部が脆くて崩れたことによるものと推察されるが造墓当初からのものか、後に改築したのかは不明。また、汁ヒラシでも棒状に加工した砂岩石が奥壁に対して平行に 2 本据えており、これは棺箱を置く台と考えられた。台石は長さ 1m、幅 10~20 cm を測る。

図版 11



全景 (左から 06-2・3・4 号墓)

サンミデーの検出状況

汁ヒラシの台石

第5節 06-3号墓

墓は基盤である砂岩層を掘り込んで墓庭と袖石、墓口、墓室を成形する。墓口は石灰岩の切石組で構築され、幅60cm、高さ90cm、奥行き1.2mを測る。閉塞石は無いが、墓口の傍らに置かれた香炉石（石灰岩製）と過去の調査事例から一枚板状の蓋石が推察される。墓口前には加工した石灰岩を組み合わせサンミデーを構築する。サンミデーの寸法は幅2.4m、奥行き75cm、高さ17cmを測る。その両側には基盤を成形して袖？を造るが残存状態が悪く判然としない。右袖側のみ3個×2段の石灰岩切石を用いて庭囲いを造るが、その残存状態も不良のため庭の範囲や参道も不明である。

墓室の平面観はほぼ正方形を呈しており、奥行き2.5m、幅2.5mを測る。高さは天井崩落のため不明。棚は平面観が「コ」字状で正面棚は3段を数える。正面（3番棚）と左右棚の高さは同じで平坦になる。2番棚右壁側と汁ヒラシ入口側では砂岩ノジュールが未加工のまま残る。汁ヒラシでは長方形の土坑が2基検出されており、本来は棺箱を置くための台石が填っていたものと推察された。

図版 12



検出状況



墓室



汁ヒラシの土坑

第6節 06-4号墓

当墓も空き墓である。墓室の平面観はほぼ正方形を呈しており、寸法は奥行き2.5m、幅2.4m、高さは天井崩落のため不明となる。棚は攪乱されているが、残存する奥行きの寸法から「コ」の字の3段と推察される。墓室では戦時中の薬品瓶や弁当箱の蓋が出土しており、その時に棚が削平され、墓口も拡張されたものと推察された。庭囲いは、墓室奥壁を背にして右側は06-3号墓との共用が窺え、左側は地山の砂岩ノジュールを成形した跡も見られるが詳細は不明。

これら3基の墓は、戦時中に壕として利用された痕跡があることや蔵骨器等の遺物が得られていない点を踏まえると、戦後のある時期に墓は移転され、後に埋もれてしまったものと推察された。

図版 13



検出状況



墓室



作業風景

第7節 06-5号墓

墓は基盤である砂岩層を掘り込んで墓庭、墓口、墓室を構築する。墓庭は約2mの堆積土と工事以前の攪乱により範囲は不明で、また、当墓と06-6号墓は横並びで立地し同様の状況となる。墓口は幅60cm、高さ1.2mと一般的なサイズ(60cm×90cm)より広く造られている。奥行き(羨道の長さ)は70cm。墓口前の堆積土を除去すると石灰岩塊や砂岩石が検出され、墓口の閉塞石と判断された。閉塞石の上半分は崩れており、そこから墓室内に泥土が流入して棚の高さまで埋まる状況が確認された。閉塞石の大きさは不揃いだがいずれも人頭大程度であった。

当墓も01-2号墓と同様に工事の機械掘削で墓室天井が削平され、穴が開いた状態で見つかった。発見時の状況は、正面と左側に出窓状の棚があり、正面に石厨子とボージャー厨子甕が各1点、左にボージャー厨子甕が2点確認された。汁ヒラシの泥土上に蔵骨器の蓋が落ちており、状況から泥土流入後に落下したことが推察され、また、落下原因は地震または沖縄戦時の爆撃等の影響が想像された。

墓室は出窓状棚と汁ヒラシで構成し、奥行き2.2m、幅2.3m、高さ1.7m、棚の高さは60cmを測る。汁ヒラシの平面観は横長の隅丸方形(1.9m×1.4m)を呈する。棚は正面奥壁と奥壁を背にして左壁側を出窓状に掘り込み各1段を造る。右棚を構築しない理由は不明で、固い基盤に起因するのか、あるいは隣に墓があって造れない状況等が推察されたが調査時には既に矢板が打たれていたため確認できなかった。棚の平面観は正面がいびつで左は略方形を呈する。類例からすると方形が主流となるが、当墓においては固い基盤層に起因したのか方形にならないのが特徴的である。墓室内の泥土を除去すると正面棚と左棚の手前下から直立状態で蔵骨器が2点検出された。壁面は全体的に石灰化し、特に泥土堆積範囲での石灰化が顕著で常に湿気の多い環境下であったことが想像された。

汁ヒラシではブタ頭骨の埋納土坑が検出された。土坑は左棚下で墓口壁側(第11図参照)に位置する。寸法は長径38cm、短径30cm、深さ10~15cmで平面観は楕円形を呈する。土坑内に攪乱は無いが骨は分離状態で検出されたため頭位は判然としない。隣接墓(06-6号墓)でもほぼ同様に検出されており、その状況から類推すると正面奥壁側に向く可能性がある。

遺物は墓室内で蔵骨器6点と瓶子1点が得られた。蔵骨器の種別は石厨子1点、ボージャー厨子甕5点となる。瓶子は墓室右壁側の汁ヒラシ上から直立状態で検出されており、単独で置かれたものと推察された。蔵骨器には銘書があり氏名や続柄等の情報は確認できたが、年代等の情報は得られなかった。

図版 14



左：発見見時の状況（上：正面棚、下：左棚）

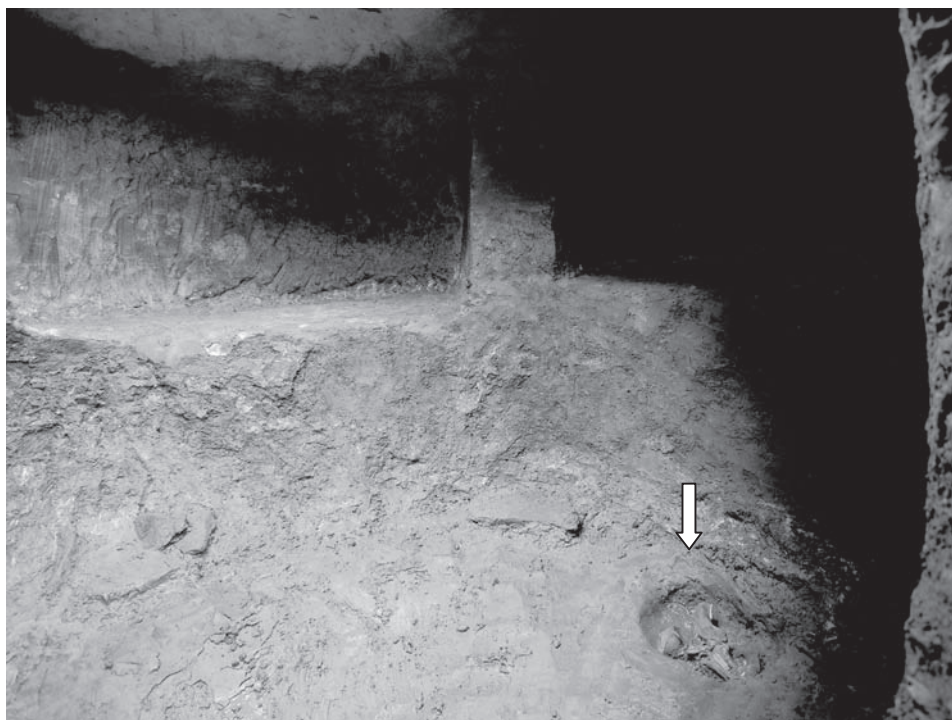
上：墓口の閉塞状況



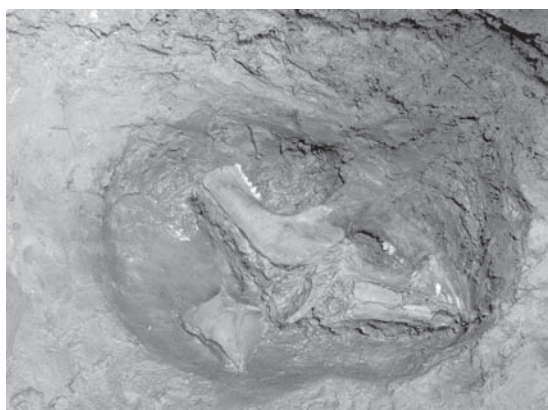
蔵骨器の検出状況



瓶子の出土状況



埋納土坑（ブタ頭骨）の検出状況



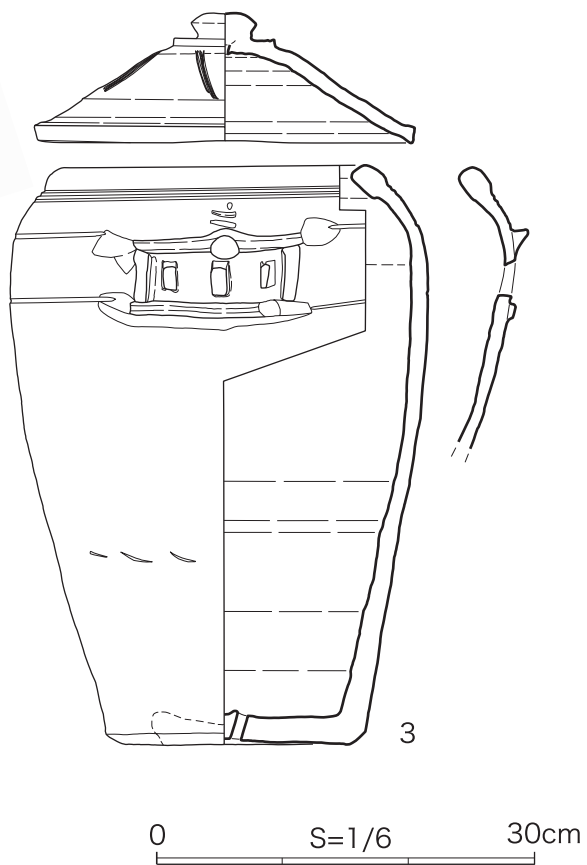
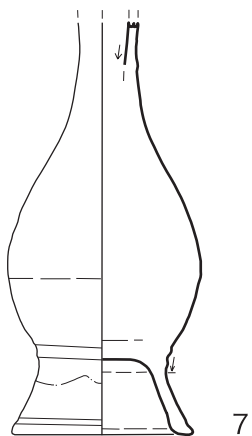
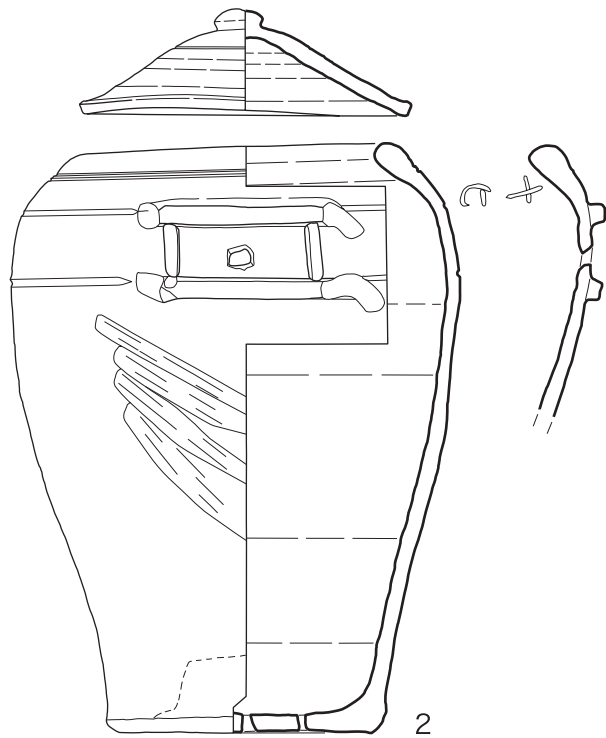
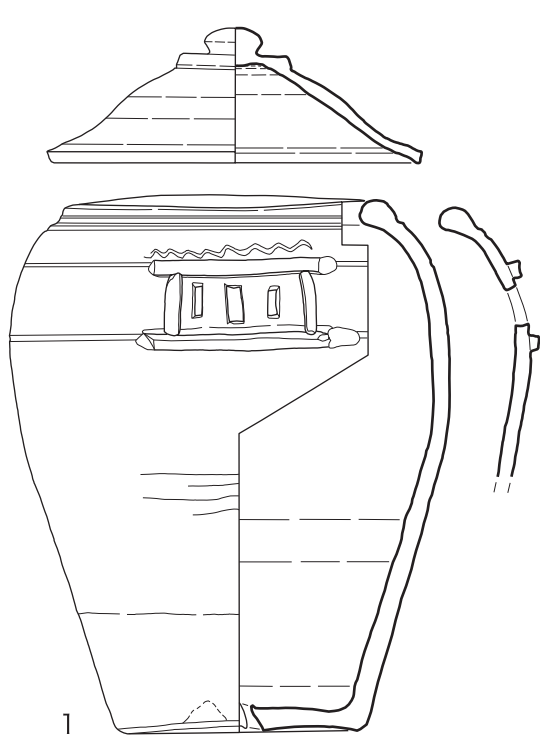
埋納土坑の検出状況



墓口の検出後

第7表 06-5号墓出土遺物（蔵骨器他）観察表

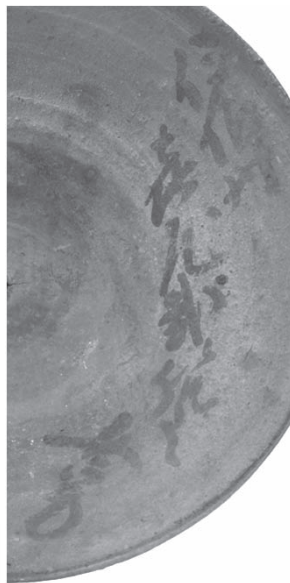
蔵骨器 No.	名称	型式	寸法 cm				観察所見 ①つまみ・マド枠 ②文様 等 ③色調 ④その他	銘書	被葬者			備考
			口径(身) 直径(蓋)	器高(身) 高さ(蓋)	胴径	底径			人数	性別	年齢	
1	ボージャー (蓋)	V a	29.2	10.7	-	-	①無孔、有台 ③外面7.5YR4/1【褐灰】、内面10R4/3【赤褐】	-	-	-	-	
	ボージャー (身)	III a	25.0	42.8	34.3	18.7	①平葺形、1方2方 ②頸部沈線2条、底部孔5個 ③外面5R4/1【暗赤灰】、内面5YR5/2【灰褐】 ④口唇部に目痕	-	1	女性?	成人	
2	ボージャー (蓋)	V b	25.8	8.5	-	-	①無孔 ③外面10R5/4【赤褐】、内面2.5YR5/4【にぶい赤褐】 ④外面数箇所に亀裂、黒色鉱物粒多く器面調整やや雑	-	-	-	-	
	ボージャー (身)	III a	25.2	47.0	35.0	21.8	①平葺形、1方 ②頸部沈線2条、底部孔5個、判有り ③外面10YR5/2【灰黄褐】、内面5YR5/2【灰褐】	-	1	男性?	成人	
3	ボージャー (蓋)	II a	29.6	10.3	-	-	①有孔、有台 ②多条沈線文5個 ③外面2.5YR5/3【にぶい赤褐】、内面2.5Y5/1【赤灰】	伊祖村 喜屋武筑登 之女房	-	-	-	
	ボージャー (身)	IV	23.8	46.2	32.5	20.2	①平葺形、1方2方 ②頸部沈線3条、底部孔5個、判 ③外面7.5YR5/2【灰褐】、内面5YR4/1【褐灰】	-	1	女性	成人	
4	石厨子 (蓋)	-	長径70.5 短径61.0	28.0	-	-	②正面と両側面の下端部に垂木意匠 ③2.5Y8/1【灰白】 ④サンゴ石製	-	-	-	-	
	石厨子 (身)	-	長径63.2 短径53.0	45.5	-	長径61.5 短径52.5	②2方 ③2.5Y8/1【灰白】 ④サンゴ石製、口唇部に1mm～2cmの自然孔多数	-	4	男性 女性	成人3 小児1	
5	ボージャー (蓋)	V b	30.4	-	-	-	①無孔(破損) ③外面2.5YR5/3【にぶい赤褐】、内面10R5/4【赤褐】 ④やや歪む、外面に石灰石粒と付着物(粘土粒)	浦添村 かま戸口口	-	-	-	
	ボージャー (身)	III a	25.2	48.6	36.1	20.4	①平葺形、1方4円 ②頸部沈線1条、底部孔1個、判有り ③外面5R4/1【暗赤灰】、内面2.5YR4/2【灰赤】 ④口唇部貝目痕、器表面付着物	-	1	女性	成人	カンギク貝11 ウミノナ貝1 (身内部から)
6	ボージャー (蓋)	II a	30.5	10.6	-	-	①有孔、有台 ②多条沈線文5個 ③外面5YR5/3【にぶい赤褐】、内面5YR6/3【にぶい橙】	浦添村 三ら奥間	-	-	-	
	ボージャー (身)	IV	26.0	48.5	33.8	20.4	①平葺形、1方2方 ②頸部沈線3条、底部孔5個、判有り ③外面2.5YR5/3【にぶい赤褐】、内面10YR5/1【褐灰】	-	1	女性?	成人	
7	瓶子	-	-	-	7.5	7.1	②口縁部欠損(打割?)、袴状の貼付高台、黒釉(暗褐色で白っぽい粒子を含む)を高台途中まで施釉、高台をつまんで浸け掛け ③外面N4/0【灰】、内面10YR4/1【褐灰】 ④素地は赤橙色の微粒子、僅かに石英を含む、湧田焼か					汁ヒラシ(右壁より)に置かれる



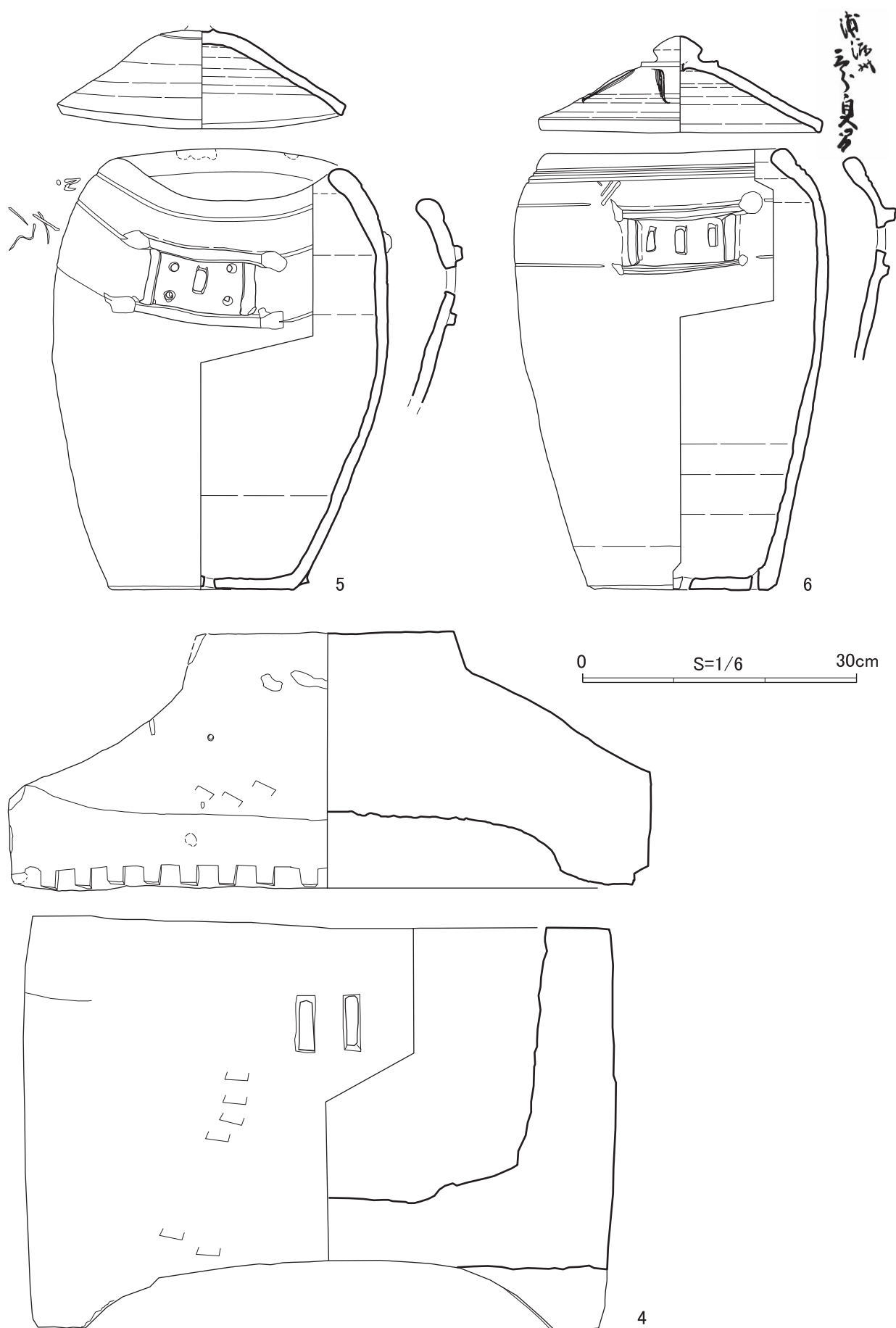
仁徳天皇
御宇
壬午年
秋
八月
乙未
日
新羅
王
遣
使
貢
物

第12図 06-5号墓出土遺物(蔵骨器・瓶子)

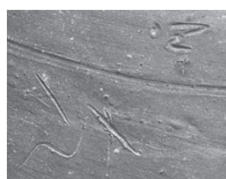
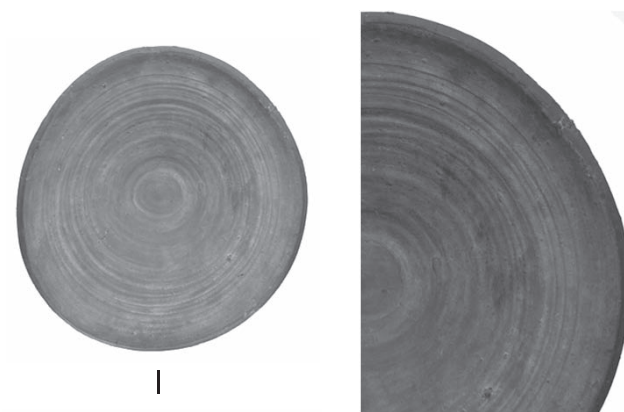
口唇部の目痕



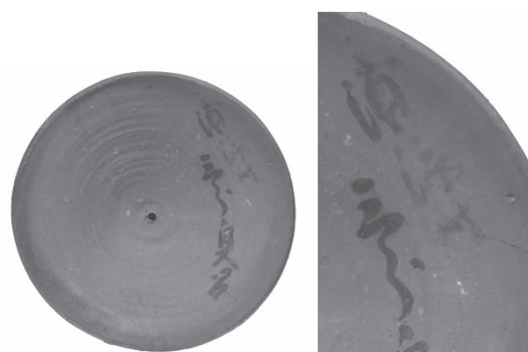
図版16



第13図 06-5号墓出土遺物(蔵骨器)



5



6



4



图版17

第8節 06—6号墓

当墓も工事中に発見された墓で06-5号墓と横並びで立地している。

墓室は出窓状棚と汁ヒラシからなり、6基の蔵骨器を安置する。墓室の寸法は奥行き2.2m、幅3.0m、高さ1.5m、棚高60cmを測り、汁ヒラシの平面観はほぼ正方形(2.0m×1.9m)を呈する。棚の平面観はすべて略方形で、寸法は概ね長辺1.2m、短辺40cmを測る。正面棚上部で砂岩ノジュール(幅90cm×奥行き40cm)が突出しており、その下には蔵骨器が安置できない状況となっている。

当墓の墓室内でも隣墓と同様に汁ヒラシで泥土が堆積していた。堆積土は厚いところで30cm程度と棚の中位までに止まり、当墓においても泥土上に蔵骨器の蓋が2点落下していた。

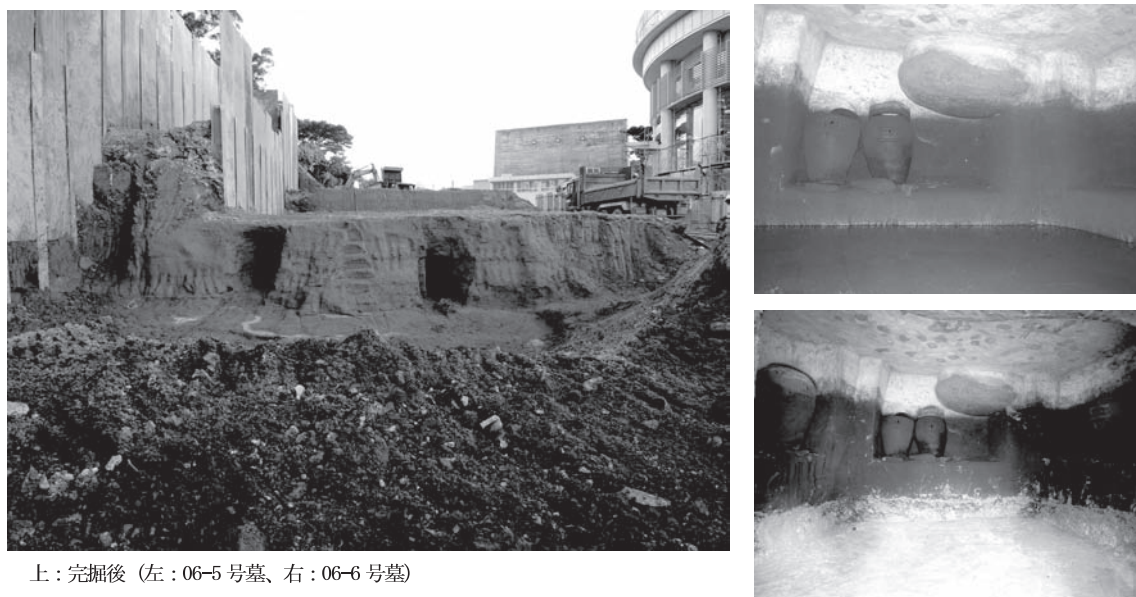
墓口の閉塞は石灰岩塊と砂岩石を用いて積石で閉じる。墓口前では加工した石灰岩と砂岩石の敷石(サンミデー?)が墓口幅で検出され、敷石の下には暗渠が構築されていた。墓口の寸法は幅70cm、高さ70cmを測るが、高さについては墓口上部に突出する砂岩ノジュールに制約されている。墓口上部壁と砂岩ノジュールの僅かな隙間から本来の墓口高を推測すると1.2mを測る。

当墓においても汁ヒラシでブタ頭骨の埋納土坑が検出された。検出位置も06-5号墓とほぼ同じだが、当墓の土坑は墓口側壁面に接している。大きさは長径30cm、短径25cm、深さ15cmの略円形を呈し、地山を掘り込んでいる。残存状態は良好で上下顎骨とも正置を保持し、頭位は側壁(棚直下の壁面)に平行して正面奥壁側に向いている。

遺物は、墓室内で蔵骨器6点と墓口前の敷石縁から瓶の口縁部破片が1点得られた。蔵骨器の種別はボージャー厨子甕5点、転用蔵骨器1点で銘書は確認できなかった。

当墓と06-5号墓は共通点が多く、隣り合う墓同士の棚形状が出窓状という点や埋納土坑の検出場所がほぼ一致する点から言えば両墓の構造を熟知した者(同一の墓大工)による造墓が推察される。相違点を挙げると、墓の規模(墓室面積)や敷石、暗渠の有無等が挙げられる。また、両墓の蔵骨器の類似性からなんらかの被葬者選別があった可能性が推察される。

図版 18



上：完掘後(左：06-5号墓、右：06-6号墓)

左上：06-6号墓の着手前状況

左下：06-6号墓の墓室検出後



墓口検出後



敷石下の暗渠検出後



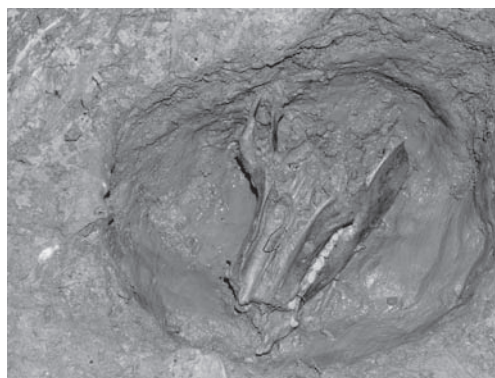
正面棚



獣骨埋納土坑の検出状況



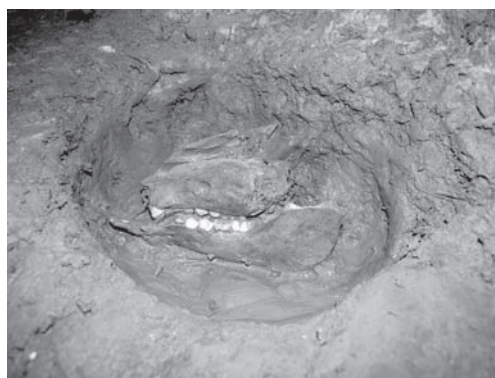
右棚



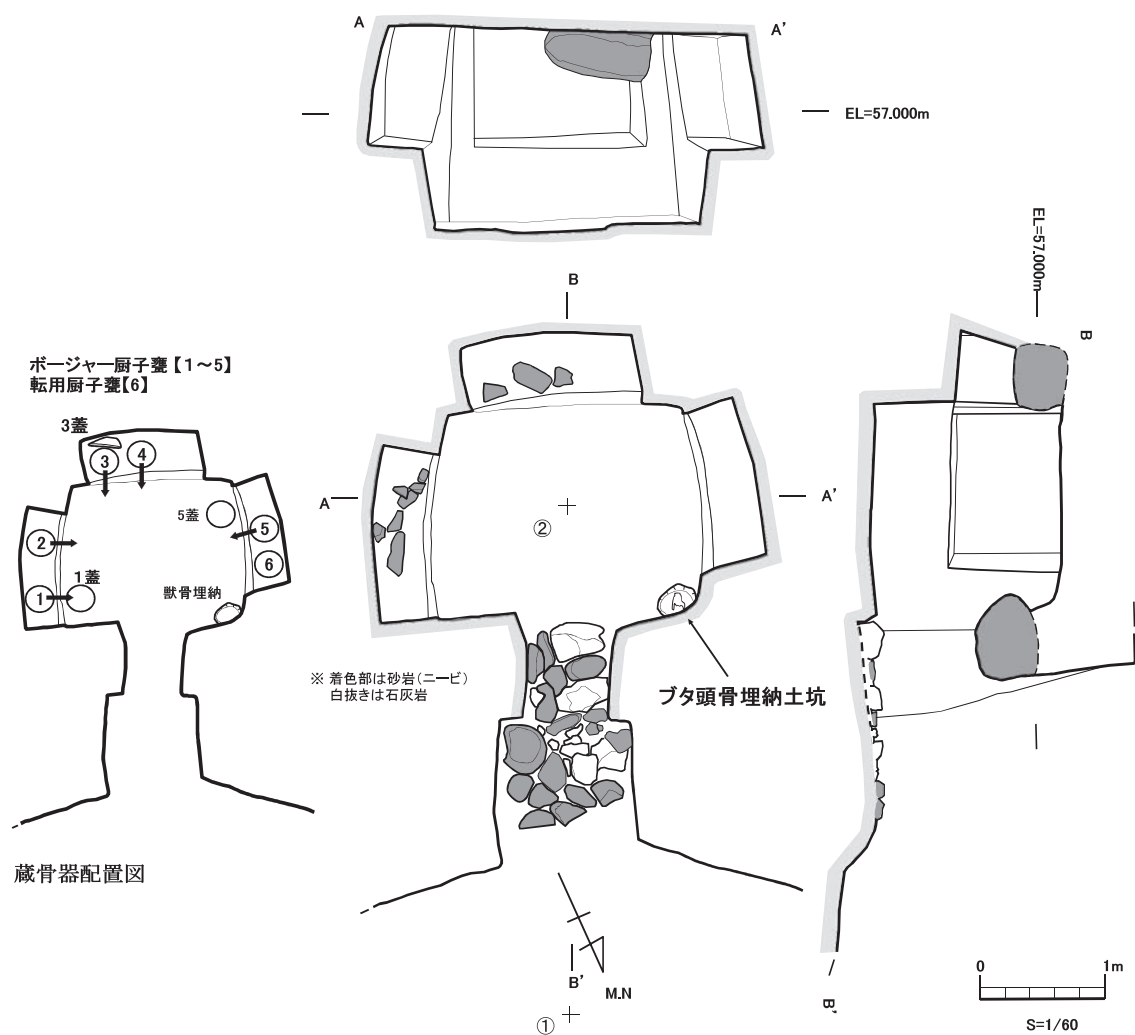
同上



左棚



同上



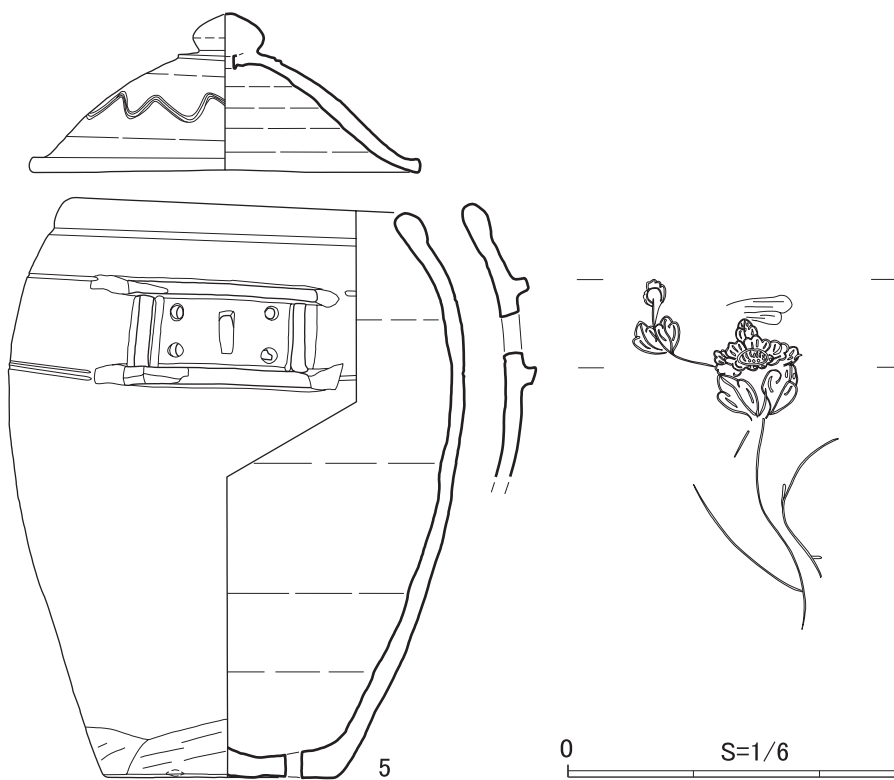
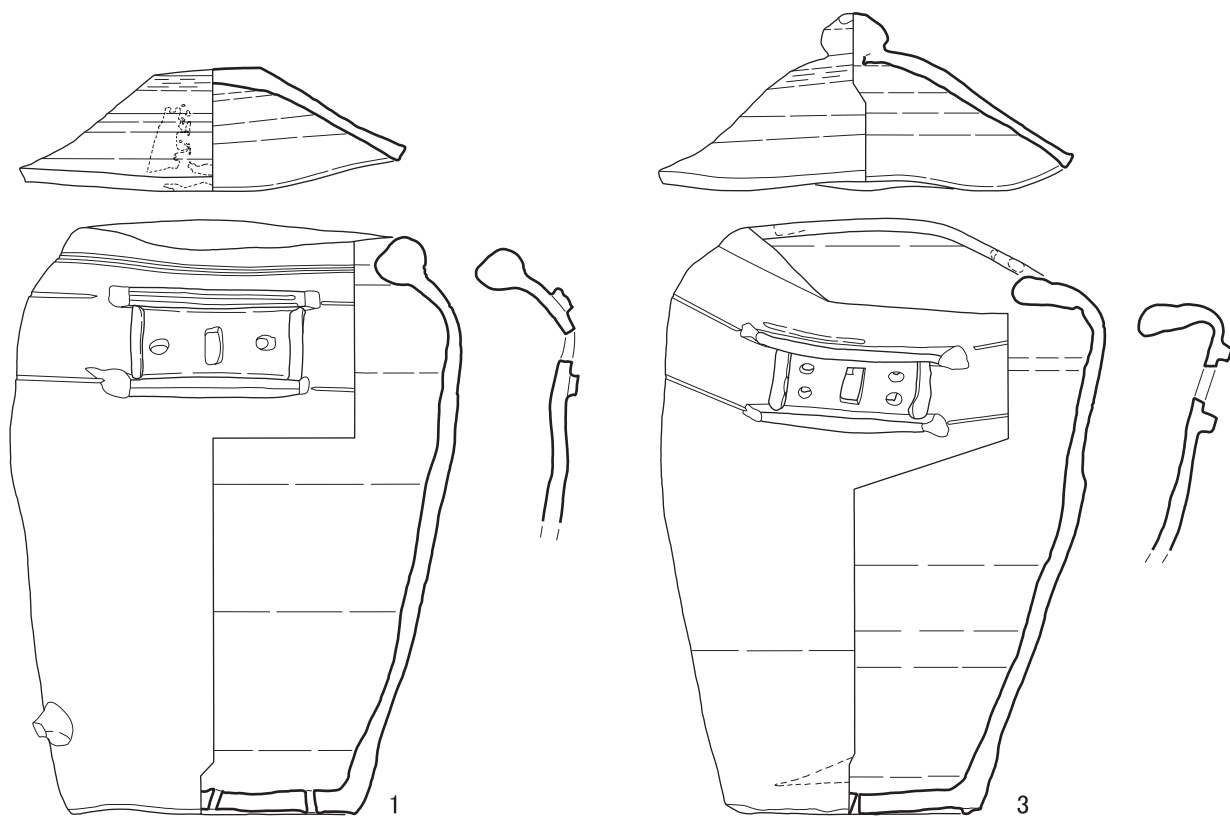
第14図 06-6号墓遺構図及び蔵骨器配置図

第8表 06-6号墓遺構観察表

立地場所 の基盤	外 観 形 式	墓口		庭の構築方法 墓の位置(座標)	サンデー の有無	墓室		棚数		特徴等
		構築 方法	奥行			平面 形態	奥行	正面		
			幅				幅	左		
			高さ				高さ	右		
小祿砂岩 島尻泥岩	掘込墓	基盤を掘り込む	70	断面L形に基盤を削平。庭の範囲は攪乱により不明。 ①x=27287.508 y=22290.312 ②x=27283.501 y=22289.846	?	隅丸 方形	220	1	墓室に蔵骨器6点安置。正面左右壁を方形に掘り抜き出窓状に棚を造る。汁ヒランから棚までの高さは60cm。左棚下でブタ頭骨埋納土坑検出。墓口は石灰岩や砂岩が混在することから積石で閉塞か。墓口前に上面成形した石灰岩や砂岩を敷き、その下に暗渠を構築。床面はクチャ。室内の泥土堆積は薄く、床面の石灰化が著しい。06-5号墓と共通点が多く同時期の造営か。墓口の高さが砂岩塊(ニービヌフニ)で制限される。	
			64				300	1		
			70				150	1		

第9表 06-6号墓出土遺物（蔵骨器他）観察表

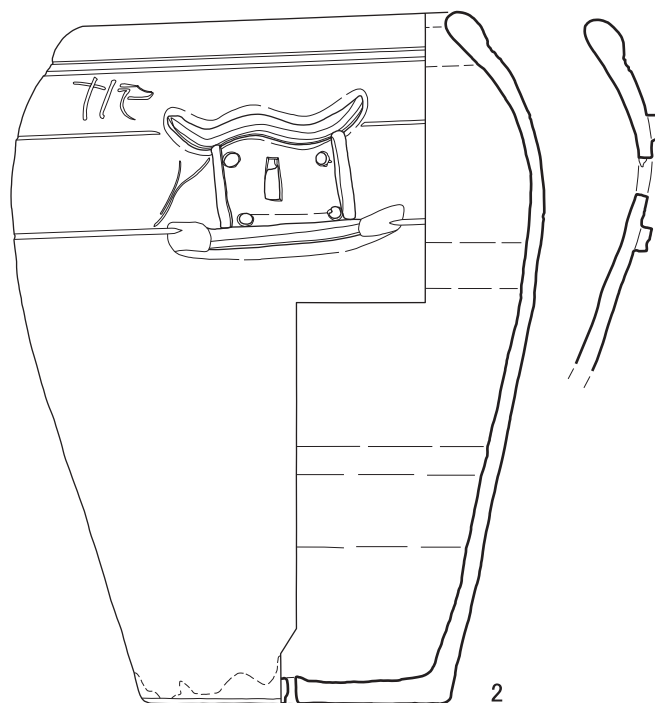
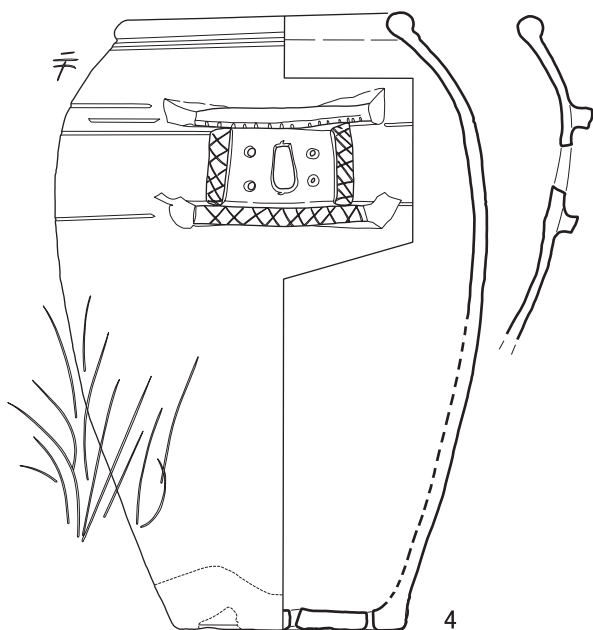
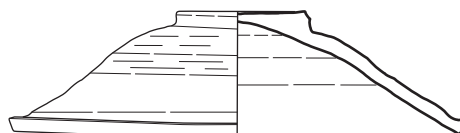
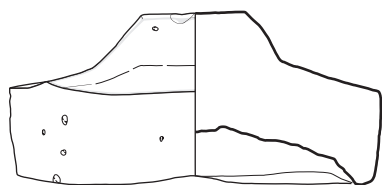
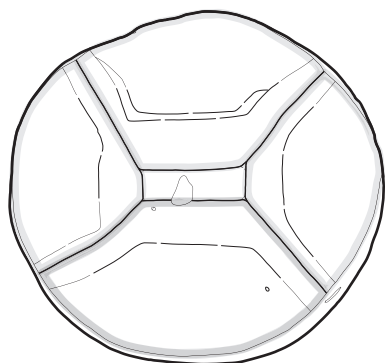
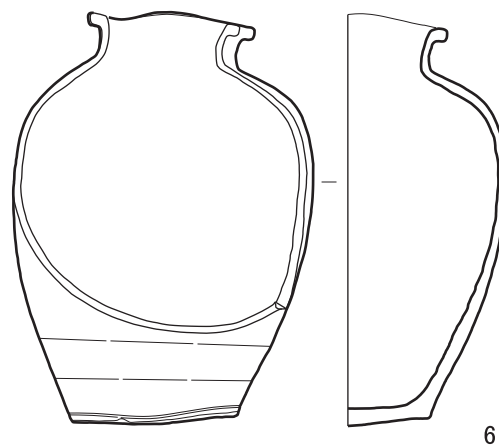
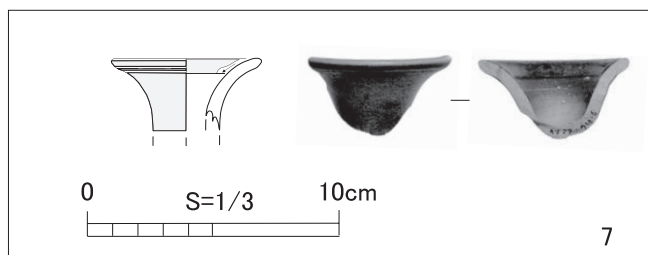
蔵骨器・ 遺物No.	名称(器種)	型式	寸法 cm				観察所見 ①つまみ・マド枠 ②文様 等 ③色調 ④その他	銘書	被葬者			備考
			口径(身) 直径(蓋)	器高(身) 高さ(蓋)	胴径	底径			人数	性別	年齢	
1	ボージャー (蓋)	VI	30.0	9.8	-	-	①糸切り痕明瞭 ④ 外面10R5/4【赤褐】、 内面2.5YR5/4【にぶ い赤褐】、外面に石 灰付着	-	-	-	-	
	ボージャー (身)	IIIa	26.4	47.4	34.3	22.4	①平葎形、1方2円 ②頸部沈線2条、底 部孔6個 ③外面 10R4/1【暗赤灰】、内 面2.5YR5/1【灰赤】	-	1	女性?	不明	
2	ボージャー (蓋)	VI	35.6	10.0	-	-	①有台、糸きり痕明 瞭 ③外面2.5YR5/4 【赤灰】、内面 2.5YR5/4【にぶい赤 褐】 ④外面の一部 で高温によるガラス 質化や多孔化、亀裂 が見られる	-	-	-	-	
	ボージャー (身)	V	30.0	55.2	42.0	24.0	①唐破風形、1方4 円 ②頸部沈線3条、 底部孔5個、判有り ③外面10YR5/2【灰 黄褐】、内面5YR5/2 【灰褐】	-	1	不明	不明	
3	ボージャー (蓋)	IIIa	32.2	14.1	-	-	①有孔 ③内外面 5YR5/3【にぶい赤 褐】 ④赤色鉱物粒、 石灰粒が内外面に 所々見られる、焼き 膨れが著しく端部が 波状化する	-	-	-	-	
	ボージャー (身)	IIIb	22.2	47.6	34.6	19.8	①平葎形、1方4円 ②頸部沈線1条、底 部孔8個 ③外面 10R4/1【暗赤灰】、 2.5YR5/2【灰赤】 ④ 口唇部に貝目痕?	-	1	不明	不明	
4	石製蔵骨器 (蓋)	-	28.0	13.8	-	-	サンゴ石製、重量 5.0kg、色調は内外面 2.5Y8/1【灰白】、平 面観円形、上部入母 屋形に加工、輪郭を 墨?で彩色、内外面 に2~9mmの自然孔	-	-	-	-	
	ボージャー (身)	IIa	21.8	49.3	33.5	18.0	①平葎形、1方4円 ②頸部沈線2条、底 部孔4個、判有り、側 面に草文(沈線) ③ 外面2.5YR4/2【灰 赤】、内面2.5YR4/3 【にぶい赤褐】	-	1	男性?	不明	
5	ボージャー (蓋)	IIa	30.4	12.6	-	-	①有孔、有台 ②波 状文(沈線) ③外面 2.5YR5/2【灰赤】、内 面10R5/3【赤褐】	-	-	-	-	
	ボージャー (身)	IIIa	26.6	45.6	35.8	18.2	①平葎形、1方4円 ②頸部沈線1条、底 部孔5個、背面に蓮 華文(沈線) ③内外 面7.5YR4/2【灰褐】	-	1	男性?	不明	
6	転用蔵骨器 壺(身)	-	13.0	32.8	23.4	13.0	③内外面5R4/1【暗 赤灰】 ④底部は焼 き膨れにより歪む	-	1	-	-	
7	瓶	-	5.9	-	-	-	②口唇部内外面に 飴釉、頸部下に鉄釉 (褐釉?) ③外面 5YR4/1【褐灰】、内 面2.5YR4/1【赤灰】 ④素地は灰白色の微 粒子、沖縄産施釉陶 器					墓口前の敷石 隙間から出土



第15図 06-6号墓出土遺物(蔵骨器)



图版20



0 S=1/6 30cm

第16図 06-6号墓出土遺物(蔵骨器他)



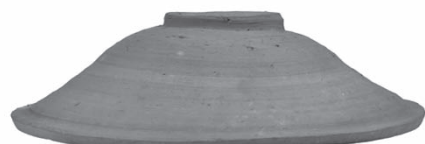
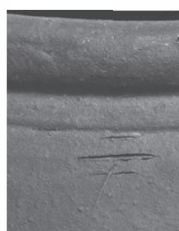
6



1



4



2

图版21

第5章 総括

本章では遺構（主に墓室）と遺物（蔵骨器）を通して当墓群の造墓年代や使用年代を明らかにしていきたい。その方法として墓室の棚形状に注目していることから棚について説明していく。

棚とは、墓室内で蔵骨器を安置するために基底面と段差（高低差）をつけて区画された場所を指しており、その形状は出窓状や段状、コ字状、段状とコ字状の組み合わせ等、様々なバリエーションが確認されている。

棚における問題点は、いつ、どのような理由で造られ、なぜ幾つも形状があるのかということであろう。棚の有る墓で造墓年代が最古となるのは第二尚氏王統の玉陵（1501年）で、次に沢岷親方が葬られている上里墓（1524年）が挙げられる。玉陵は墓室が三室（東室、中室、西室）で、東西室を蔵骨器安置所、中室を改葬前の遺体安置所としている。墓室の棚についてみると、東室は出窓のように正面左右に小部屋があって、西室にはコ字状の棚がある。上里墓の墓室は一室であるが納骨室、中室、前室で構成され玉陵三室分と同等の機能を有している。この二例から言えることは王族や上流士族層の墓においては16世紀前半には棚や汁ヒラシがあって蔵骨器と遺体の安置場所を明確に区別していたことがわかる。

一方で、銘苅古墓群4号墓や47号墓（下位墓：15～16世紀）、ナカンダカリヤマの古墓群（16～18世紀）、当山世利原古墓群（16世紀前後）等の「崖葬墓」には棚は無いが、前二者の墓群では「改葬」が行われていた。銘苅古墓群下位墓を例にすると入口近くに一次葬を、奥側に二次葬を集骨する状況から改葬前後で遺骨の安置場所を区分しており、この区分はまだ棚を造るには至っていないが、改葬の風習が墓室内に汁ヒラシと集骨場所をもたらしたと考えられる。この区分を発展させて棚が造られるようになったインパクトとして蔵骨器の登場と位牌の関係性を推測している。棚が「段」状になっているのは15世紀後半に王族に導入された位牌との関連性、位牌を祀る仏壇の壇との類似性が想像される。つまり、壇に祀る位牌に対比させるように墓室にも段（壇）を設けて蔵骨器を安置したのではないかと想像している。奇しくも最初に棚が造られたのが玉陵であり、この墓室が祖形となって後世の亀甲墓や掘込墓に漸次的に受容されていったと考えられる。また、昭穆の思想（上里墓にある左昭、上中、右穆の石板陰刻）が後に登場する正面左右に棚を造る出窓状やコ字状の意匠に影響を及ぼしたのではないかと推察される。當銘由嗣氏は玉陵の墓室形が凸形墓室やコ字状棚の祖形となる可能性を指摘している（註1）。

玉陵以降の造墓で棚の有る墓についてみると、上里墓や渡嘉敷三良の墓、池城墓等は棚と汁ヒラシで構成されている。西銘章氏は風葬から改葬（納骨）への変遷について洗骨葬を特徴とする近世墓が成立するまでは17世紀後半～18世紀前半の期間に止まらず、長期にわたって緩やかに変遷したと考えている（註2）。下表は16～18世紀の墓室の棚の有無と形状を整理したもので、改葬の導入で蔵骨器が変遷する過程と似たような状況が墓室形状でもみられ、棚の無いものや出窓状棚、段状棚等が並存し、当該期はまだ墓室形状も定型化していないことがわかる。

第10表

棚の有無・形状	墓（群）名 / 年代	15世紀	16世紀	17世紀	18世紀	備考
有	コ	●				1501年造営
	1段	●				1524年造営
	1段		●			1604年造営
	1段			●		1670年造営
	出窓			←→		
無	-	←	→			
	-		←	→		
	-		←	→		

※「●」は造営年代、「矢印と破線」は使用年代を表している。

墓室形状が定型化するのには王府による造墓管理や墓地制限令以降と推察される。これについては次の遺構編で詳述するものとし、王府の造墓政策について考えてみたい。王府の造墓管理は康熙 33（1694）年に始まり、土族や庶民が墓を造る際に届出が義務付けられるようになる（註3）。墓敷地の制限は雍正 13（1735）年の令達「田地奉行規模帳」で、墓地面積を土族十二間角、庶民六間角に限定している。嘉慶 14（1809）年には、造墓時の外観意匠も身分で差別化されるようになる。これら王府の造墓政策からは次のことが考えられる。造墓管理が始まる康熙 33 年以前は王府へ届出無しで造墓できたこと、また、墓地制限についても雍正 13 年以前は届出さえすれば自由に造墓できたものと考えられる。つまり、王府の管理下に置かれる以前の造墓は、地位や財力に応じて如何様にも造れたことを示唆しており、このことは 16～18 世紀の墓室の棚形状が定型化しない一因と考えられる。

ここまで棚の有無や形状、その発生について考察してきた。棚の発生理由については根拠に乏しい仮説であるが、今後も注視していきたいのであえて記述した。特に、棚の形状がバリエーションに富むことについては、改葬や蔵骨器の導入を契機とし、墓の永続的使用に伴う蔵骨器安置スペースの確保に対応した墓室構造の発展結果と考えており、王府の造墓政策導入後に定型化に向かうと考えている。次に当墓群の遺構から見えてくることについて、過去の調査事例を踏まえ検討していくこととする。

遺構

調査墓を墓室類型でみると、2 類（出窓状棚）と 5 類（コ字状＋段状棚）に分類される。

2 類型墓は 3 基（01-2 号墓、06-5・6 号墓）で共通する特徴として、蔵骨器はボージャー厨子甕が主体となる。汁ヒラシの面積は 2 m²を越え、ブタ頭骨の埋納土坑が検出される。墓口の寸法は幅 70cm、高さ 1.1～1.2mを測り、方位は概ね北を向く等が挙げられる。

5 類型墓は 4 基（01-1・06-2～4 号墓）で移転廃棄された空き墓であった。共通する特徴として、汁ヒラシの面積が 2 m²以下でうち 2 基の墓で棺箱を置くための台石を備える。墓口の寸法は幅 60cm、高さ 90cmで方位は概ね西南西を向く。墓口やサンミデーを石灰岩やニーピ石で構築する。基盤（砂岩層）成形または石灰岩を用いて庭囲いを造る。

この二つの類型墓の相違点を検証していくと、まず、立地でみると 2 類型墓は丘陵北側斜面に、5 類型墓は南側斜面に造られており、この分布域の違いは墓域の広がり方を示していると考えられる。また、棚の形状や墓口・汁ヒラシの寸法の相違点は造墓方法の転換が窺え、これらの違いは造墓年代に差異があると考えられる。このことを実証するために、沖縄県内の発掘調査報告書や調査事例で造墓年代（又は使用年代）が判明している近世期（1609 年以降）の墓の墓室類型を古い順に並べたものを第 11・12 表にまとめた。

第 12 表は造墓年が判明している墓を黒丸で、推定される造墓期間を破線で表しており、第 11 表を時系列で整理したものとなっている。これによると 17 世紀代の墓室類型は「2b・3a・4b」が確認できる。2b は 17 世紀中葉～18 世紀第 1 四半世紀、3a は 17 世紀第 3 四半世紀～18 世紀第 3 四半世紀、4b は 17 世紀第 3 四半世紀～18 世紀前半に納まる。次いで 18 世紀代には「3b・4c」が、19 世紀に入ると「5b・5a」が登場する。17 世紀代に三つの類型が並存する理由は全くの不明である。既に墓室型が確立されており選択できたのか、あるいは地域差や財力差、または別の理由によるのか判然としないが、先述した王府の造墓政策導入前の造墓であることも関連しているのか興味は尽きない。18・19 世紀代の墓室類型のうち、5 類型は明らかに 3 類型の発展形と考えられ、この形は将来的に増加していく蔵骨器の安置スペースに対応したものと容易に想像できる。推測の域をでないが、墓室の棚形状の変化は王府の造墓管理が始

まった康熙 33（1694）年を契機に、雍正 13（1735）年の墓地面積の制限等によって規格化が進み、3 類型から 5 類型への変化をもって、現代のお墓でもみることができる最終（完成）型になったのではないかと考えられる。

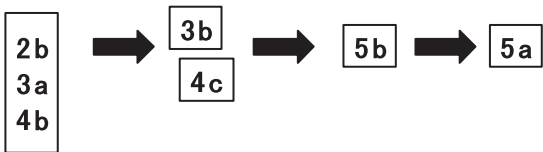
既述してきた根幹に関わるデータについては造墓年代の判明している墓が少なく信憑性に不安が残ること、また、墓は売買や補修、改築され、蔵骨器も交換や移動できることも理解している。しかし、現時点で墓室の棚形状が定型化していく過程における一つの目安として提示できるものと考えており、今後の資料の増加によって、より精度が高められていくことに期待したい。

第 11 表

墓室類型	墓名	造墓年・代	備考
2b 出窓状	ナーチュー毛古墓群39号墓	17世紀中葉～後半	那覇市
3a 無段コ字状	小港墓	1660年頃	久米島町
4b 段状（1段）＋柱状意匠	池城墓	1670年	今帰仁村
4b 段状（1段）	大山上江家古墓	1699年	宜野湾市
4b 段状（1段）	崎原所在の墓	1699年	西原町
3a 無段コ字状	木のさく原墓	1701年	久米島町
3a 無段コ字状＋イケ	チヂフチャー古墓群10号墓	1703年	浦添市
2b 出窓状	前田・経塚近世墓群98-1号墓	1704年	〃
4b 段状（1段）＋イケ＋石柱	玉城朝薫の墓（邊土名家の墓）	17世紀後半～18世紀前半	〃
3b 有段コ字状	小港松原墓	1718年	久米島町
3b 有段コ字状	赤道渡呂寒原第2号墓	1736年頃	宜野湾市
4c 段状（3段）	宜野湾御殿墓	1738年頃	那覇市
3a 無段コ字状＋柱状意匠	内間西原近世墓群27号墓	1748年	浦添市
3a 無段コ字状	赤道渡呂寒原第12号墓	1758年頃	宜野湾市
5b 有段コ字状＋段状	宜野湾佐喜真墓	1793年	〃
5a 無段コ字状＋段状	赤道渡呂寒原第9号墓	1827年	〃

第 12 表

墓室類型 \ 年代	1650	1675	1700	1725	1750	1775	1800	1825	1850
2b 出窓状	●	●	●	●	●	●	●	●	●
4b 段状（1段）	●	●	●	●	●	●	●	●	●
3a 無段コ字状	●	●	●	●	●	●	●	●	●
3b 有段コ字状			●	●	●				
4c 段状（2段）				●					
5b 有段コ字状＋段状						●			
5a 無段コ字状＋段状								●	



遺物

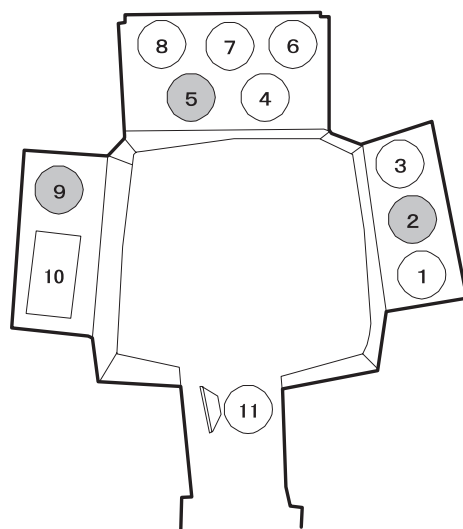
墓（遺構）に伴う主要遺物は蔵骨器である。従って蔵骨器の製作年が判れば、墓の使用期間が導き出せると考えている。蔵骨器の型式編年は浦添市文化財調査研究報告書等^{（註4）}を参考にした。当書では銘書の洗骨年と、器形の部位や文様等の変化に着目して編年を行っている。一般的に洗骨年は蔵骨器の入手（購入）時期と考えられていることから、洗骨年＝蔵骨器製作年が想定できる。以下で3基の埋没墓の蔵骨器について検討していく。

01-2号墓

第13表は蔵骨器の身の製作年代をまとめたものである。これをみると、ボージャー厨子甕・身が1680～1820年、マンガン釉甕形厨子甕・身が1770～1850年となり、当墓の使用期間は1680～1850年と想定できる。ボージャー厨子甕の型式編年は蓋と身のセット関係でより年代幅の絞込みが可能であるが、当墓においては殆どのセット関係が把握できなかったため大雑把なものとなってしまった。

次に蔵骨器の安置状況（第17図）についてみると、墓口側の汁ヒラシに置かれたNo.11（以下No.は省略）よりも製作年代が新しい蔵骨器が棚に3点（2・5・9）安置されていることが判明した。これまでの調査事例からすると正面奥棚側から古い蔵骨器が安置され、墓口側に最も新しい蔵骨器が置かれる傾向が窺えるため、ある時期に蔵骨器が整理された可能性が高いと判断される。

第17図



第13表

No.	種別	型式	製作年代	備考
1	ボージャー厨子甕	Ⅱa	1680-1735	
2	マンガン釉甕形厨子甕	Ⅲ	1810-1850	
3	ボージャー厨子甕	Ⅳ	1725-1820	
4	ボージャー厨子甕	Ⅳ	1725-1820	
5	マンガン釉甕形厨子甕	Ⅱ	1770-1800	
6	ボージャー厨子甕	Ⅲa	1700-1800	焼骨
7	ボージャー厨子甕	Ⅲa	1700-1800	
8	ボージャー厨子甕	Ⅱa	1680-1735	
9	マンガン釉甕形厨子甕	Ⅱ	1770-1800	
10	赤焼御殿型厨子甕	-	1680-1790	
11	ボージャー厨子甕	Ⅲa	1700-1800	洗骨年:1764年

蔵骨器についてみると、1、6～8、11 のボージャー厨子甕と 10 の赤焼御殿型厨子甕が注目される。6～8 は正面棚の奥壁側へ並列で安置される状況から当墓における古手の蔵骨器と考えられるものである。6・7 は焼締めが強く暗褐色を呈する特徴から喜名・知花窯系の蔵骨器に類似するものであるが、身の口唇部に貝目詰みが認められる。新垣力氏は貝目詰みの技法を湧田窯の技法と指摘している（註5）。また、6 には焼骨が納められており、洗骨が主流となる前代の葬法あるいは特殊葬法（註6）と考えられるもののほか、墓移転に伴う儀礼（註7）の可能性もあり、当墓の蔵骨器の配置が整理された状況であることを考えると第4章 01-2 号墓で述べた「神御墓」との関連性も想像される。1・8 は胴部正面下または両側面に沈線で蓮華文が描かれ、形式的には最も古い（1680～1735 年）。10 は上江洲編年で 1680～1790 年代に位置づけられる陶製家形蔵骨器である。過去の調査事例からすると家形は正面棚に安置する傾向が窺えるが、当蔵骨器は右棚にマンガン釉甕形厨子甕と並列で安置されている。11 は唯一、年代に関する銘書が記されており、乾隆 29（1764）年の七夕洗骨が墨書されている。長年月経て日時を選んで洗骨した場合、汁ヒラシに再びジョーバーン（門番）としてそこに安置する（註8）との報告と一致している。

既述を整理すると次のとおりである。①焼骨を納めた 6 が正面棚の奥に安置されている。②1764 年七夕洗骨の 11 を墓口前の汁ヒラシに門番として置く。11 は 1764 年頃の製作年が想定される。③11 よりも製作年代が明らかに新しい 2 が棚に安置されている。④ある時期に墓口の閉塞を積石から一枚板石に変え、不用となった積石が汁ヒラシに集積される。⑤不用石を汁ヒラシに置くには、同場所に一次葬骨が無い状況と考えられる。

上記①と②は、洗骨や墓の移転は日取りに制約があつて容易でないが、七夕は日なしとされ、タブーを伴わずに洗骨、移転ができる。この日に洗骨されるのは長いあいだ死者がでなかったことを意味し、御祝ウスクイとか御祝ギレーイといって歓迎される（註9）との報告と一致する事例であろうか。③～⑤については 2 の製作年代（1810～1850 年）のある時期に墓の移転があつて、その際に墓口の閉塞を積石から一枚板石に造り変え、不用となった積石を汁ヒラシに集積したことが推察される。また、蔵骨器の安置状況が製作年代順の配置とならない状況は、太祖を中央に左右に世代分けして安置する昭穆の序に則した可能性も考えられたが銘書の情報が無いため断定できない。あるいは二つ以上の墓を一つにまとめた場合、当墓のような蔵骨器の配置も可能となることも推察される。

いずれにしても、推察の域をでないが 2 の蔵骨器の製作年代のある時期に墓の移転があつた可能性が考えられ、そうすると墓の売買の可能性をはじめ、出窓状棚を有する墓室構造の築造時期にも関連してくるため、現段階では不明な点が多く判然としないことから、類例の増加を待つて検討したい。

06-5 号墓

当墓の蔵骨器を製作年代でみると、1・2 が 1740～1770 年、3 が 1725～1745 年、5 が 1740～1770 年、6 が 1725～1750 年となる。蓋と身のセット関係でより年代幅の絞込みが可能となり、これらをまとめると 1725～1770 年の期間が墓の使用年代と推察される。4 は石厨子で正面棚に安置され、当墓で最も古い蔵骨器と考えられるが製作年代は不明である。

このほか、5 内には人骨以外に貝類が納められていた。貝はカンギク貝が 11 点、ウミナ貝 1 点であった。類例は伊祖の入め御拝領墓の 8 号蔵骨器（カンギク貝 9 点ほか海産・淡水産・陸産貝 18 点）や 22 号蔵骨器（枝サンゴ片 28 点）等が挙げられ（註10）、海で亡くなった際に砂利やサンゴ石等を小甕に納めるという報告（註11・12）に近い状況が推察される。

06-6 号墓

当墓の蔵骨器を製作年代でみると、1 が 1760～1790 年、2 が 1760～1775 年、3 が 1710～1735 年、4 が 1680～1735 年、5 が 1700～1745 年となる。当墓の蔵骨器も蓋と身のセット関係が把握できたことで、製作年代の絞込みが可能となり、概ね 1680～1790 年の期間が墓の使用年代と推察される。ところで、4 の蓋は第 3 章第 3 節でも述べているが、材質はサンゴ石製で隣接墓（06-5 号墓）の石厨子と同質で、質感や自然小孔の特徴も似ることから、石厨子作成の際に削り出して不要となった部分を利用して製作した可能性が推察される。故に第 3 章 06-6 号墓の調査成果で述べたように、両墓が同一職人による造墓で、且つ、同時期に造られた可能性が高いものと推察される。

結びに

本市で発掘調査した古墓には、墓碑が無い場合造墓年が判明するケースはほぼ皆無といえる。稀に墓誌（墓室内にある厨子甕の銘書や誌板等）から造墓年が判明することもあるが、殆どが被葬者情報であるため、洗骨年から墓の使用期間の推測に留まっている。繰り返しになるが、墓は売買や補修、改築されるほか、蔵骨器も交換や移動できるものである。今調査においても 01-2 号墓がその可能性を疑われる事例となりえる。また、多くの墓が沖縄戦時に壕として利用されており、本来のオリジナル性が失われていることも発掘調査で度々確認されている。よって、安易に蔵骨器の製作年代を墓の使用年代に置き換えることは、年代に関する信頼性を損ねてしまうため留意しなければならない。

沖縄県内の近世墓調査は開発等による記録保存によってデータの蓄積も格段に増加しているところであるが、その殆どは造墓年不明の墓である。当報告書では主に造墓年と墓室形状が判明している墓を検証してきたが、事例が少なく精度的には低いものと認識している。今後、蓄積データを基に特にオリジナル性の高い墓の遺構（墓室形状）・遺物（蔵骨器）のセット関係を検証し、造墓年や墓の使用期間の精度を高めていく作業が必要と考えている。とりわけ情報不足の感は否めないが、当墓群に係る遺構・遺物を検証した結果は第 14 表のとおりである。

今調査を概括すると、銘書では当丘陵の墓地利用は 18 世紀中頃まで遡る。被葬者情報からは浦添（仲間）・伊祖両村の境界に位置する当丘陵の土地利用の形態が垣間見える。遺物では湧田窯系技法が認められる蔵骨器が 17 世紀後半の可能性が提示できる。当時の風習等を窺い知る情報として、焼骨や蔵骨器に貝を納める行為は類例も少なく注目される。遺構については課題を残すところであるが、北から南へ展開していく傾向が窺え、墓室形状も南北で異なっている。このことは墓の立地や造墓変遷に関係すると考えられるが今調査では明らかにできなかった。県内の他墓群との比較作業が今後の課題となる。

第 14 表 調査墓の造墓・使用年代（推定）

年代 墓No.	1650	1675	1700	1725	1750	1775	1800	1825	1850	1875	1900
01-1											
01-2											
06-1											
06-2～4											
06-5											
06-6											

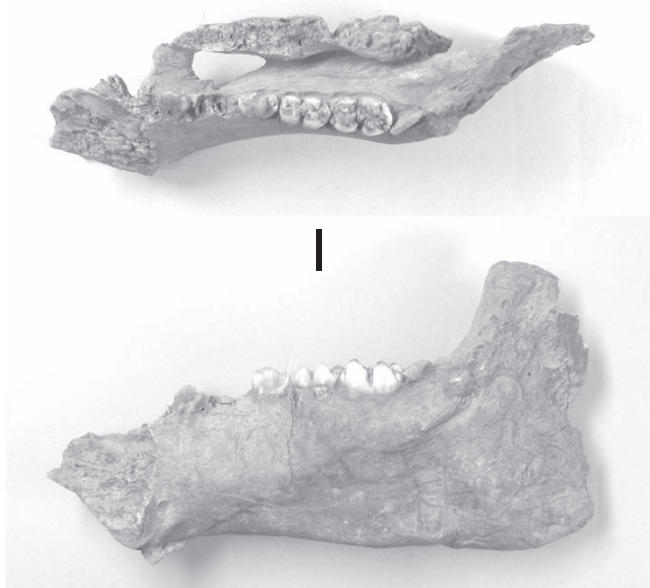
註

- 1 那覇市教育委員会 2012『首里久場川ハタマチュウ古墓群』p117
- 2 西銘章 2004「沖縄における葬墓制の変化 ― 近世墓研究ノート ―」『南島考古』23 沖縄考古学会 p75
- 3 玉木順彦 1989「史料に見る沖縄の葬墓」『シンポジウム 南島の墓 沖縄の葬制・墓制』沖縄県地域史協議会編 p 223、224
- 4 浦添市教育委員会 1997『伊祖の入め御拝領墓の厨子甕と被葬者 ― 近世墓の考古学的調査による家族復元 ―』p 2～11
浦添市教育委員会 2006『比嘉門中の家族史・比嘉門中墓の調査概要』p 5～11
- 5 新垣力 2013「17 世紀前半～中葉の琉球陶器について―「初期無釉陶器」にみる薩摩族の影響―」『鹿児島考古』第 43 号 鹿児島県考古学会 p11
- 6 玉木順彦 1989「史料に見る沖縄の葬墓」『シンポジウム 南島の墓 沖縄の葬制・墓制』沖縄県地域史協議会編 p 225～232
- 7 上江洲均 1982『沖縄の暮らしと民具』慶友社 p 250
- 8 浦添市史編集委員会 1983『浦添市史 浦添の民俗 第四巻資料編 3』浦添市 p426
- 9 沖縄タイムス社 1983『沖縄大百科事典 中巻』p 713
- 10 浦添市教育委員会 1997『伊祖の入め御拝領墓の厨子甕と被葬者 ― 近世墓の考古学的調査による家族復元 ―』p 12
- 11 浦添市史編集委員会 1983『浦添市史 浦添の民俗 第四巻資料編 3』浦添市 p428
- 12 平敷令治 1995『沖縄の祖先祭祀』p 293

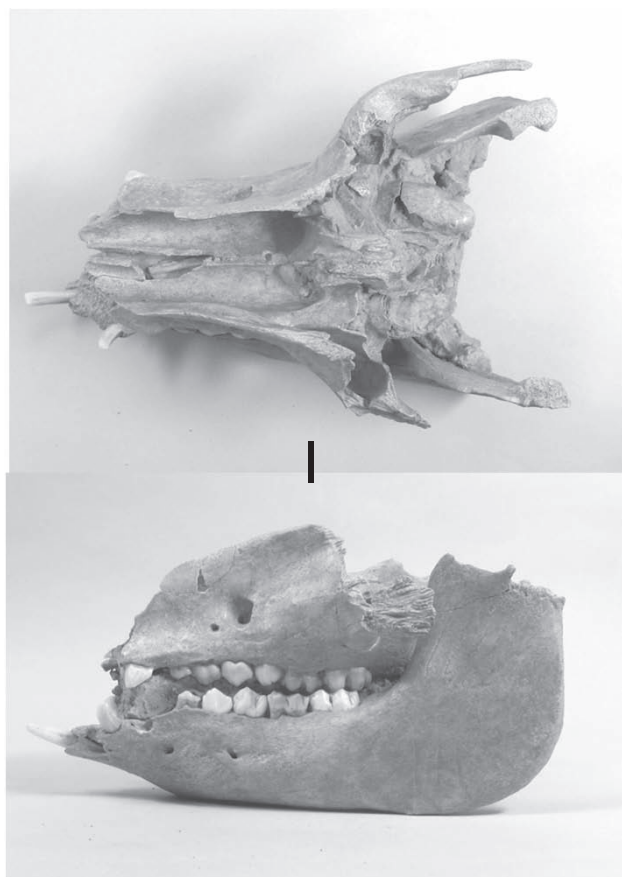
引用・参考文献

- 浦添市史編集委員会 1987『浦添市史 第六巻 資料編 5』浦添市
- 浦添市教育委員会 1986『チヂフチャー古墓群発掘調査報告書』
- 浦添市教育委員会 2004『内間遺跡 内間カンジャーヤーガマ遺跡 内間西原近世墓群Ⅲ ― 浦添市都市計画街路勢理客線道路改良事業に伴う緊急発掘調査 ―』
- 浦添市教育委員会 2005『仲間稲マタ原近世墓群 稲マタ原陣地壕群（仮称）てだこ交流文化センター建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査』
- 浦添市教育委員会 2007『市内遺跡発掘調査報告書（Ⅰ）―平成 13～18 年度調査報告―』
- 浦添市教育委員会 2011『前田・経塚近世墓群 2 首里大名地区 ―那覇広域都市計画道路事業 3・3・16 号国際センター線に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―』
- 浦添市教育委員会 2012『前田・経塚近世墓群 3 前田真知堂 B 丘陵（Ⅰ）前田真知堂 C 丘陵（Ⅱ）―都市計画街路国際センター線及び沢岬石嶺線工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 沖縄県地域史協議会編 1982『南島の墓 沖縄の葬制・墓制』
- 沖縄県立埋蔵文化財センター2001『ヤッチのガマ・カンジン原古墓群 ― 県営かんがい排水事業（カンジン地区）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書―』
- 沖縄県立埋蔵文化財センター2005『ナカンダカリヤマの古墓群』
- 宜野湾市教育委員会 1989『土に埋もれた宜野湾』
- 宜野湾市教育委員会 2008『宇地泊西原丘陵古墓群』詳細分布調査・個人墓地造成に係る埋蔵文化財緊急発掘調査報告書
- 宜野湾市教育委員会 2011『市内埋蔵文化財発掘調査報告書 2』
- 那覇市教育委員会 1994『ヒヤジョー毛遺跡』
- 那覇市教育委員会 2000『ナチュー毛古墓群 ― 那覇新都心土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告Ⅶ―』
- 那覇市教育委員会 2007『銘苅古墓群』
- 那覇市教育委員会 2012『首里久場川ハタマチュウ古墓群』

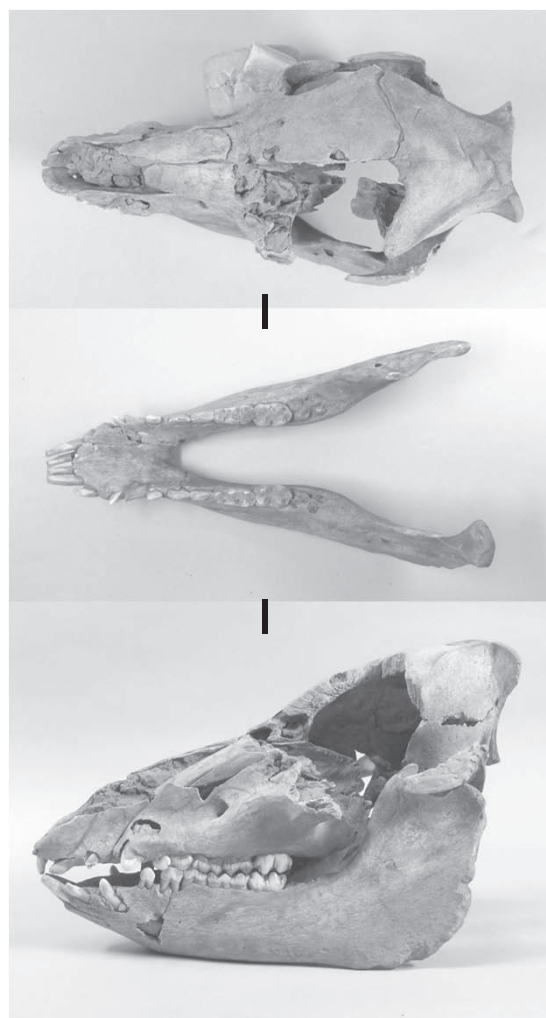
当資料の報告については紙面の都合上、写真の掲載とした。詳細については菅原広史氏の「近世墓から出土する脊椎動物遺体-浦添市内の近世墓における動物骨埋納に関する予察-」沖縄考古学会2013年度研究発表会資料集『琉球近世墓の考古学-発表報告編-』p 59を参照されたい。



01-2号墓出土



06-5号墓出土



06-6号墓出土

報告書抄録

ふりがな	なかまいなまたばるきんせいぼぐん							
書名	仲間稲マタ原近世墓群Ⅱ							
副書名	浦添カルチャーパーク整備事業及びてだこホール建設事業に伴う発掘調査報告書							
シリーズ名	浦添市文化財調査報告書							
編著者名	安和吉則							
編集機関	浦添市教育委員会							
所在地	〒901-2501 沖縄県浦添市安波茶一丁目 1 番 1 号 Tel:098-876-1234							
発行年月日	平成 26（2014）年 3 月 31 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡 番号		北緯	東経	発掘期間	発掘 面積	発掘原因
なかまいな 仲間稲マタ原 近世墓群	おきなわけん 沖縄県 うらそえし 浦添市 なかま 仲間	47208	—	26° 15′ 1″	127° 43′ 16″	2001/10/3 2006/6/15	200 m ²	記録保存 調査
	種別	主な年代		主な遺構		主な遺物		特記事項
	墓	近世		墓 8 基		蔵骨器、人骨、副葬品		
要約	浦添市仲間小字稲マタ原に所在する砂岩丘陵地に近世の墓が造営されている。本発掘調査では、近世から近代にかけて造営されたと考えられる 8 基の墓が検出された。うち 3 基の墓からは、人骨や蔵骨器、副葬品が出土した。調査で得られた蔵骨器の型式や蔵骨器に書かれた銘書から、18 世紀中葉には丘陵地一帯が墓地として使用されたと考えられる。このほか獣骨の埋納や二種の墓室構造が確認されるなど、今回の調査成果は、文献資料が少ない近世から近代の墓構造の変遷をを考える上で貴重な成果であり、また、当該期の造墓儀礼を考える上でも重要な成果が得られた。							

浦添市文化財調査報告書

仲間稲マタ原近世墓群Ⅱ

浦添カルチャーパーク整備事業及び
てだこホール建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査

発行日 2014年3月31日

発 行 浦添市教育委員会

〒901-2114 沖縄県浦添市安波茶一丁目1番1号

tel:098-876-1234 fax:098-878-1487

印 刷 有限会社 ドリーム印刷 tel:098-889-2784

